

山
ざら

第29号 平成10年11月
関東氷上郷友会



おもわず新しい



“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

専務 工井 崇可利

本社	536-0004 大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
○東京支店	111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536-0004 大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451-0014 名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-2503 福岡県糟屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッパイ株式会社

本社	536-0004 大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-0202 千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451-0014 名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
関西工場	669-1300 兵庫県三田市テクノパーク2-2	Tel 0795-68-5500
福井工場	919-0417 福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-2503 福岡県糟屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケージ株式会社

本社	536-0004 大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-1116 兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

山ざる

第29号



山ざる 第29号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「月響」(45号・スイス・アイガー)

〈口絵写真〉①④雪の三ツ塚史跡公園(市島町)

②③篠山川に架かる鉄橋(山南町)／撮影・徳田八郎衛

△こあいさつ▽

同郷のよしみを……渡邊隆男 5

平成九年度「郷友集いの会」……6／会計報告……12

△ふるさと随想▽

古里讃歌……渡邊隆男 13／猪のはなし……木村つた江 15

ご時世だから、しょうがないね……大野善三 17

丹波の遺跡、旧跡を訪ねる……谷口 捷 24

戦中、戦後の柏中時代……藤井宏次 28

映写室からみた想い出のシネマ……坂本重雄 30

円通寺の思い出……藤田玲子 32

海外雄飛を夢みて……木下 聡 34

丹波への思い……山口和久 35

丹波を撮る……撮影・徳田八郎衛 38

《近況・エッセイ》

ノールウェイ紀行……生田清弘 40

Charityと希望……松本榮一 48

私と丹波焼……義積 保 50

小網代の森に魅せられて……山本紀子 52

俳句と母……足立和巳 55

ピーター・ハーモンさんとの出会い……常岡幹彦 56

臨終の母の一言……宮野 近 57

信州に住んで……松井千恵子 57

ゴルフ思考あれこれ……細見次郎 59

ぞうさんの贈り物……堀井隆川 60

《わが師を語る》 葛谷俊道先生……徳田八郎衛 62／細川倫夫 63／丸川健三郎 64

《丹波通信》 柏原町長選挙で公開討論会……小田晋作 66

《ふるさとの民話と伝説》 独鈷の滝……68

《ふるさとの祭り》 谷川・常勝寺「鬼こそ」……70

《BOOKS》……73

《同窓生交歓》……76

《ふるさとトピックス―丹波新聞から―》……78

《インフォメーション》 展覧会……81／同好者募集……85／新会員の皆さまへ……85

協賛広告……86／編集後記……101

田 捨女の名句

- 花は世のためしに咲くや一さかり
○ 水鏡みてや眉まゆかく川柳
○ 春雨は藍あいが染めだすやなぎ色
○ 春を夏に引のばしてやさがり藤
○ 鳴けや／＼いまは何時いづなんほとゝぎす
○ 雲路にも近道あるや夏の月
○ くる秋の切際きりざわみする一葉哉
○ 紅葉にたはるゝ鹿や色ごのみ
○ 松茸はたゞ一秋を千とせ哉
○ 降るは憂うれし雪にあとつく雨のあし
○ 岩かどもむつくりとなるや雪の朝

田 捨女―貞閑禪尼

寛永十年（一六三三）
柏原に生まれ、六歳
にして「雪の朝二の
字二の字の下駄のあ
と」の句を読み、英
才の俳女として名を
馳せたが、五四歳、
出家して名を貞閑と
改めた。元禄四俳女
の一人と称されたが、
出家後は俳諧から遠
ざかり専ら和歌にい
そしんだ。六六歳没。

同郷のよしみを

会長 渡邊 隆 男



郷友の皆さま、お元氣の
と存じます。

五十三年余も昔のことな
に、私にも昨日のことのよう
に鮮やかに甦る古里出郷の一
場面があるのです。

「ほな行ってくる……」何もかもを振り切るような思いで、
生家のくぐり戸を出ました。昭和二十年四月の初め、中学を
卒業したばかりの私は十七歳、戦争も末期、まだ見ぬあこが
れの東京は、すでに度重なる爆撃に焼けただれてゐるはず、
それものかわ、大きなリュックを背負って進学の途につい
たのです。まさに戦地に赴く思いでありました。

両親が見送ってくれます。この家も見納めかも、思いつめ
て振り返ったとき、祖父が小走りにかどに出てきたのです。

「ちよっと待っとくれ」見れば手に一升瓶と湯呑みを持っ
てゐるのです。「酒か?」「水じゃ」「何で?」「これはナ、水
盃さかずきというもんじゃ、最期の別れの盃じゃ、まあ飲め」「そん

ごあいさつ

なんいやじゃ」「そういわんと、まあ飲んどくれ——よしよ
し、ほな今度はわしにもついでくれ——よっしゃ、これで氣
がすんだわや、ほなまあ達者でナー」

涙を見せまいと走り出たあの朝は、一面の靄でした。

むろんそれが今生の別れではなかったのですが、あのころ
は明日をも知れぬ、そんな時代でありました。

その後は今も、せめて年に一度は里帰り、里の氣を満喫す
るのですが、東京に帰りざわがまた、いささかやるせない思
いにかられます。今も元氣な母は九十五歳、かどに出て手を
振りながら、必ず涙するからです。

あの人も逝った、あの友ももういない。この山川も、こと
によると見納めになるかも……、古里は帰るたびに、知らず
色あせていきます。そしてさまざま思い出だけが、いつま
でも鮮やかに甦るのです。

誰にもそんな古里があり、誰にもそんな思い出があります。
そして誰しもそんな古里を、いつまでも温めつづけます。

関東氷上郷友会は、同じ古里を共有する者の集いです。

老いも若きも男女別なく、同郷のよしみを結びましよう。

年に一度の郷友の懇親会が、今年は十一月十四日(土)の
正午から、千代田区九段下の九段会館で開かれます。皆さま
どうか万障くりあわせて賑々しくご出席くださいますよう、
お待ちしております。

九段坂の秋 愛でながら…

平成9年度「郷友集いの会」



平成九年度の「集いの会」は、十一月二十四日（振替休日）、九段会館において催され、総会、祝寿会、懇親会が行われた。通算一〇二年目の会合となる今回の参加者は七十二名。

総会は渡辺会長のあいさつに始まり、坂上勝朗理事の会務報告のあと、谷口浩章理事から平成九年度会計報告、荻野武監事から監査報告があり、いずれも満場一致の承認を得て滞りなく総会を閉じた。

祝寿会は、大木正徳様、大沢まつ子様、高橋通也様、塚口生郷様、常岡昭様の五人の方々をご招待したが、いずれも都合悪く、ご出席がなかった。今後の益々のご健康をお祈りしたい。

懇親会では、柏原町議会議長小倉文夫氏の祝辞を頂戴した。また、県立柏原高等学校校長堀井隆水氏からも、先の同校創立百周年記念大会の報告と、事業協賛に対する謝辞があった。乾杯の音頭は佐々木盛雄氏。軽妙な時事評論を混じえながら杯を挙げて、宴会の幕を開ける。

今回は、柏原町議長の小倉氏、柏原町助役田原氏のご臨席を得て、いつにも増して郷里の町々の話題に花が咲いた。宴もたけなわとなれば、お楽しみの抽せん会が催される。景品は、いつもながら会員有志からの寄贈による心尽くしの品々である。

午後三時三十分閉会。

当日の出席者、お楽しみ抽選会景品寄贈者名は次の通り。

●平成九年度「郷友集いの会」出席者（順不同・敬称略）

〈来 賓〉

小倉 文夫（柏原町議会議長）

田原 幹夫（柏原町助役）

堀井 隆水（柏原高等学校校長）

坂本 啓（兵庫県東京事務所次長）

〈会 員〉

○青垣町（五名）

足立和巳 足立勲平 足立静雄 山中秀雄 安原三智子

○市島町（十二名）

井田悦子 大槻作治郎 荻野武 片岡クミ子 木村つた江

近藤勇 塩見美恵子 高見嘉都司 高見秀史 鶴田ゆき子

丸川宥次郎 森下千寿子

○柏原町（十六名）

井本義一 生田清弘 上村愛子 小田晋作 小田富士夫

岡林逸男 久下亮介 坂本重雄 常岡幹彦 徳田八郎衛

野村文子 葉山勝 松下文雄 岡吉明 村上善英 宮野近

○春日町（六名）

上田脩 木呂子恵美子 佐々木盛雄 月尾敬子 吉住重造

和田幹夫

○山南町（十一名）

池田忍 小田明子 久保春雄 田中寛 千葉淳子

中居篤子 増井攻 村岡勝美 村上督 渡辺貴美子

梶原やす子

○氷上町（十三名）

安達健一郎 足立和孝 足立謙悟 上高子 岸本昌子

坂上勝朗 谷口捷 谷口浩章 長谷川尚 藤原知徳

本城英明 渡邊隆男 渡辺也寸美

○多可郡（四名）

大石佐代子 小糸イキ 笹倉強 藤田正雄

○多紀郡（一名）

梶原清

●お楽しみ抽選会景品寄贈者（到着順）

近藤 勇夫 せんべい 二個

常岡 幹彦 薄塩天然だし醤油 五セット

荻野 武 フジフィルム 一五パック

大野 善三 丹波産米5kg入 四袋

高見嘉都司 ジャンボ・ベアぬいぐるみ 二個

岡林 逸男 フランスワイン「メルロー」 五本

久保 良雄 越後長岡産「柿の種」 四個

増井 攻 コースト、エプロン、皮むき 各一個

洗剤、ハンカチ
 細川 倫夫 プール茶（中国産）
 木村つた江 レスポワール
 小田富士夫 丹波つくね豆
 坂本 重雄 小袋せんべい
 岸本 勲 ゴルフボール四個入
 ワイン
 坂上 勝朗 スモークサーモン
 足立 勲平 テレホンカード
 高見 秀史 ワイン
 足立かをる 健康パンスト
 氷上 高校 同校特製味噌
 中居 篤子 千鳥屋カステラ
 本城 英明 黒豆せんべい
 片岡クミ子 凍豆腐
 松下 文雄 柏高一〇〇年史
 足立 和巳 日高だしこんぶ
 谷口 浩章 テレホンカード
 千葉 淳子 大納言小豆
 徳田八郎衛 買い物袋
 吉住 重造 玉露粉茶小袋入り
 足立 静雄 ビール券

各二個
 五個
 一個
 一個
 一個
 四セット
 一本
 二本
 一〇枚
 一〇本
 一〇枚
 一〇枚
 一〇袋
 一〇個
 五個
 一〇個
 二冊
 一個
 一一枚
 一〇袋
 五個
 八個
 一〇枚

丹波新聞社 小鼓（日本酒） 三本
 池畑豪士郎 お茶 二〇個
 池田 忍 自分史 五冊
 芦田 重秋 りんごゼリー、チョコレート 各一五個
 渡邊 隆男 テーブル・クロス 一点
 オリブオイル 五本
 木呂子恵美子 婦人もの大型ハンカチ 三枚
 野村 文子 紅茶セット 二セット
 宮野 近 テレホンカード 一〇枚
 堀井 隆川 文房具セット 一個
 関東氷上郷友会 山の芋三kg 五個
 当年産黒豆 五個
 ●寄付者ご芳名
 小倉 文夫（柏原町議会議長）殿 二〇、〇〇〇円
 田原 幹夫（柏原町助役）殿 二〇、〇〇〇円
 堀井 隆水（柏原高校長）殿 一〇、〇〇〇円
 坂本 啓（県東京事務所）殿 一〇、〇〇〇円
 和田 幹夫殿 一〇、〇〇〇円
 平岡 千代殿 八、〇〇〇円
 常岡 昭殿 七、〇〇〇円
 坂上 勝朗殿 五、〇〇〇円

谷口 浩章殿	五、〇〇〇円
須原 逸郎殿	三、〇〇〇円
高見嘉都司殿	三、〇〇〇円
葛川てる代殿	三、〇〇〇円
中井三奈子殿	三、〇〇〇円
波多 洋三殿	三、〇〇〇円
広瀬 安伸殿	三、〇〇〇円
山口 和久殿	三、〇〇〇円
山本 清士殿	三、〇〇〇円
青木 保夫殿	二、〇〇〇円
近藤 勇殿	二、〇〇〇円
澤田みさを殿	二、〇〇〇円
山中 秀雄殿	二、〇〇〇円
今井 雅之殿	一、〇〇〇円
大塚 秀武殿	一、〇〇〇円
坂本 重雄殿	一、〇〇〇円
坂本 徹二殿	一、〇〇〇円
千種 倫幸殿	一、〇〇〇円
松本 康子殿	一、〇〇〇円
村田 吉民殿	一、〇〇〇円
森本 浩殿	一、〇〇〇円

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみと呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い上げます。

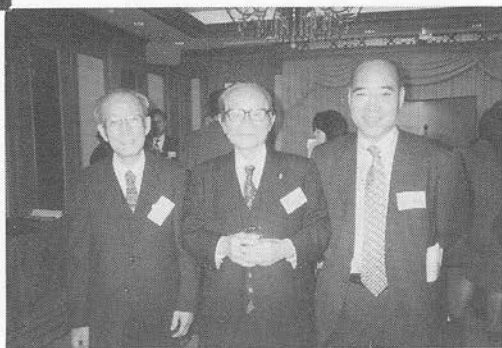
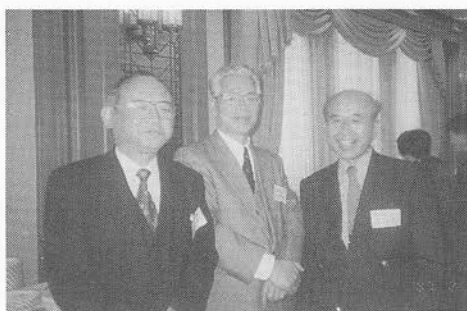
▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、丹波のきずな^①の強さを思います。

(山ざる編集部)



懇親スナップ





懇親スナッフ



懇親スナッフ

会 計 報 告 書

関東水上郷友会

(平成9年7月1日～平成10年6月30日)

会計理事・谷口 浩章

鶴田ゆき子

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,562,741	郵便貯金 561,791円 定額貯金 800,000円 振替貯金 200,950円	出 版 費	1,146,207	『山ざる』28号
年会費収入	440,000	延 198名	通信・印刷費	342,861	総会・役員会案内等
総会費収入	402,000	67名	総 会 費	420,362	総会関係支払
役員会費収入	66,000	22名	会 議 費	136,287	役員会等
寄 付 金	135,000	延 29名	支払手数料	14,140	郵便振替料 12,760円 送金手数料 1,380円
広告料収入	811,000	延 77名	消耗・備品費	60,737	
受 取 利 息	746	郵便貯金 746円	繰 越 金	1,296,893	郵便貯金 496,893円 定額貯金 800,000円
合 計	3,417,487		合 計	3,417,487	

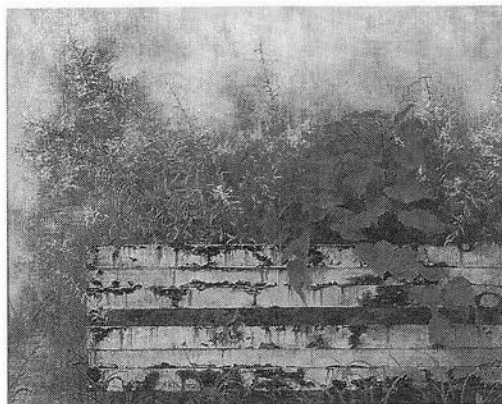
監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成10年8月1日

会計監査

足立和巳
荻野 武

ふるさと随想



新家陽子「イツカ還ル日」
(青垣2001年日本画展 読売新聞社賞)

古里讃歌(その3)

—— 逆境育ちの丹波人 ——

渡 邊 隆 男 (氷上町)

「あんた、よう儲けとってやげなネー、こっちにもちいと分けてもらいたいワ」

「あほかいな、人聞き悪い、借錢で首が廻らんちゅうのに、めったなこといわんといてーナ」

何がしかの内職か商いでもないかとやっていけない村人たちの、口ぐせみたいな会話を、ふと思いつくところでした。

それにしても昨今はどえらい時節になりました。平成恐慌”というのだそうですが、この不況といったどこまで落ち込むのでしょうか。昔のことを思えばどうということはないのですが、戦後の何十年か、何かにつけてぜいたくになり、人間がナマってしまっていますので、困ったものです。

一方、コンピュータやデジタル技術の進歩、インターネットの急速な普及などで、世界がどんどん縮まってまいります。どんな企業も根こそぎの構造的な変革期に、すでに突入した感があります。好むと好まざるとに拘わらず、文明の巨大な力学が急ピッチで、私たちの生活慣習や常識をまで席卷して

まいます。どえらい世の中になりました。

変わらないのは山と川、ついていけないこのわたし、つくづく歳を感じますが、持って生まれた身体だけは、おかげさまですこぶる達者です。どんな時代にも健康は何よりもありがたいものです。ここは古里の山河や両親先祖に感謝しなければなりません。時と時節は変わるとまよ、あしたはあしたの風が吹く。たかが百年のこの命、まあまあ悔やまずにあせらずに、楽しみながらボチボチとまいりましょう。

へおひかえなすって、まかり出ましたるこの私、姓は渡邊名は隆男、人呼んで山家の猿さると申します。生国しやうこくと発しまするは丹波の国、丹波といつても広うござんす。京の都は最果ての、酒吞童子しゅんどうしの住居すまいたる、大江の山の、ずず、ずいーつと奥の里、氷上郡ひやうじは沼貫ぬまぬきの朝坂あささか、山紫水明谷間の盆地、苔むす清水で産湯うぶを使い、雉子鳴く山は朝霧の、佐治川べりで雑魚じゃこを取り、田植、草取り牛の世話、柴刈り稲刈り肥し播き、人情ひとすじ百姓育ち、口は下手でも力持ち、勉強せんでも哲学者。どうぞよろしうおたの申します。

五十何年も東京に住んでいますと、ときには開き直って、こんな仁義の一つも切ってみたい衝動にかられます。私も東京に出てしばらくは、見るものさわるものがみなアカヌケしに見えて、田舎者のひが目で長縮ながちくしていたのですが、仕事をさせてみれば、エートコのボンボンみたいなのはだいたい

が役立たずなんですね。もつとよく見ると、東京は地方から集まった田舎者で持っている都会なんです。誰かが江戸っ子だと気取っていても、京都が都だったついこないだまでは、みな武蔵野の百姓だったのです。大正の初期、護国寺から池袋、目白、高田馬場あたりには狐や狸が出没したそうです。今でも東京は人情の希薄な五目めし、広大な田舎なのです。

江戸言葉や標準語といつても、これはずいぶん単純な言葉です。あの奥ゆかしい京言葉や丹波弁に比べると、人情の微妙表現を無視したものです。古来、老若男女がそれぞれ微妙なニュアンスで使い分けてきた敬語などはその最たるものです。洗練を極めた平安文化の京言葉、丹波言葉を、なぜ標準語にしなかったのか、悔やまれてなりません。今さらぐちつても始まりませんが、郷友後続の諸賢よ、願わくばゆめゆめ田舎者、丹波言葉のひが目にとられ給うことなかれ。

黒豆、切芋、松茸、栗、丹波の一部にしか育たないあの絶妙の風味は、いったいどういうわけでしょうか。かじけば火の出るような瘦畑に格別の仕掛があるでなし、それが他所の土地に移せば味がガタ落ちという、あの界限の風土だけが持つふしぎなエネルギーとは、いったい何なのでしょう。

兵庫というのは兵隊の庫、戦国のころからでしょうか。日清・日露の戦争以来、篠山連隊は彼我に勇名を馳せました。

敵弾に撃ち抜かれて周囲の飾り縁だけ残った軍旗を誇っていました。福知山連隊もまためつぱう強かったのだそうです。

そういえば灘の酒造りの杜氏^{とうじ}はみな、氷上、篠山あたりからの農閑期の出稼ぎでした。働き者で心棒強く、文句もいわず、夜通しの重労働にもへこたれなかったので杜氏は丹波、そして「丹波杜氏」の呼び名が定着したのだそうです。

あのあたりの丹波人もまた、ふしぎな特性を備えているのでしょうか。その昔から、京阪神の栄華をよそに、谷間の瘦地をかじきながら美しい四季の移ろいを愛で、赤貧に甘んじて生き抜いてきた「我慢の子」だったのでありましょう。

黒豆も切芋も松茸も栗も、そして人々のその特性も、あの寒村のほどよい「逆境」の賜物なのではないでしょうか。

もちろん例外はありますが、総じて丹波人は底抜けのお人好しです。頼まれると何でもいやと言えないほどのお人好しです。人情にもろいお人好しです。その昔から貧に耐え、労苦をしのんだせいでありましょう。根っからの始末屋のくせに人にだまされやすいのが玉に傷でしょうか。

丹波人は遠慮屋で、何かにつけて引つ込み思案、生来の恥ずかしがり屋で、言いたいこともいえずに内にこもってしまふのです。これでどれほど損をしているかわかりません。

丹波人には切芋のようなねばりがあります。しつこさ、底意地の強さ（悪さではありません）もまた無類です。よほど

のことにも音をあげません。つまり頑固でもあるのです。ただ目先にこだわって大局を見失うことがしばしばです。慎重にすぎて決断できない、いわゆる優柔不斷も困りものです。

丹波人は現実主義と理想主義とに分かれましょう。コツコツ足場を固める堅実派と、山の彼方の空に大望を追う夢想派とがあります。古里を脱出した関東氷上郷友会の皆さんは、むろん後者なのでありましょう。

夢想家バンザイノ華のお江戸で、ご健闘を祈ります。

猪のはなし

木村 つた江（市島町）

師走の声をきくと、何故か私は落ちつかない。生前、夫が事業をしていた頃は、あちこちに歳暮を送るため、先づデパートに足を運んだものだ。今は気儘な独り暮らしなので普段と何も変らない筈なのに、習慣とは不思議なもので何かをしなければ年が越せない気分になる。

そんなある日、丹波の友人から宅急便が届いた。早速開けて見た。眼のさめるような猪肉だ。大輪のボタンそっくりに並べてある。白の脂身で縁取られていて、それが一枚一枚の花びらのように重なり合っている。ボタン鍋とは言いで妙

である。

小学生の頃の思い出が私の脳裏をかけ巡った。現在は市島町に合併されて、鴨庄村という名称はなくなったが、村のほぼ中央に鴨庄尋常高等小学校があった。学校の横を流れている鴨庄川があり、木の欄干のついた土橋がかかっていた。私は友だちとその橋を渡る時、必ず欄干に寄りかかって川を見つめた。

「ウワー、今日の猪はごついなあ」

と男の子が叫んだ。見ると体長がメートル五十センチ程ある猪が、荒縄で前後の足を縛られ腹を上に向けて投げ込まれている。こんな光景は秋の収穫時期には殆んど毎日見かけられた。私は子供心に「なぜ川に投げ込むのかしら」と思い母に尋ねた。母は猪肉の臭みを抜くために数日水につけておくのだと言った。

私の生家は、鴨庄村字岩戸で、三十戸程の農家が山に沿ってコの字型に点在している。その集落の中に農業の傍ら狩猟を副業にしている人がいた。私たちは「鉄砲打ちさん」と呼んでいた。ある日私は、先生のガリ版を手伝っていて夕方家に帰った。父が上機嫌で母に言っていた。

「今晚わしは夕飯いらんでよ、公会堂で猪鍋食べるさかい」

この村では猟師がとった猪は、食肉業者に売るが、各家庭

で毘（鉄製）を仕掛け、たまたまそれに掛った猪は、村人全員が集って会食する習慣になっていた。そしてその何分の一かは各家庭に分配し、皆が猪鍋のご馳走に預かるのである。私は子供の頃は、肉アレルギーだったので一度も口にしたことはなかった。

秋の取り入れもすみ、晩秋蚕の繭取りも終って、今日は一日骨休めをしようと、母がご馳走を作った。その夕食の一家団欒の席で母が言った。

「ゆうべ夜中にわたしが、はばかりへ行つて戻りしなに、軒下で黒いもんが動いとった。泥棒かしらん思つておとろしかつたさかい、あわてて逃げ込んで戸の隙間から覗いとつたら、猪の親子やつた。二匹も子をつれてきとった。軒下にさつま芋があつたさかい、それを食べに来たんやろなあ。何やわたし切ない気がしたで」

猪の方でも人の気配に驚いて逃げたようだった。その話の後で、普段無口な父が笑いながら言った。

「こないだ組長さんが言うのとった。森坂で猪に追いかけたんやそうな『おーい助けてくれやーい』ゆうてわめきながら死にもの狂いで逃げたけど、誰もおらんし、もうあかん思つて、高い土手から泥田に飛び込んだんやそうな。気がついたら猪はずーっと先の方の道の真中を走つとつたさかい、ヤレヤレ助かつた思つたんやと。猪に追いかけられた時はな

あ、急に横に曲ったらよいのんや、猪突猛進ゆうてのう、猪は真すぐしか走らへんさかい、よう覚えときなよ」

私は七十年を経たその時の父の顔を思い出しながら、友人から送られてきた猪肉で、娘の家族を呼んでポタン鍋でも囲もうかと思ったのだった。

ご時世だから、しようがないね……

大野 善 三(柏原町)

東京以西なら、花が一斉に咲き始める三月下旬、柏原町上小倉にある「レストラン峠」で、昭和十八年柏原崇廣尋常高等小学校六年生卒業者の同窓会が開かれた。五十五年前の戦時下の小学校卒業者である。今回で四回目の同窓会となった。六年半前の秋、三回目の同窓会が同じ所で行われ、これに初めて出席をした。この伝でいくと、次の同窓会は七十歳を過ぎることになる。段々、健康に自信を失いつつある身として、この会に欠席すると、心残りをするように感じて出席した。

柏原の上小倉と言えば、私の小学校時代には殆どが農家で、有名な桜の名所「鐘が坂」に行く以外には余り足を運んだ経験はない。そこに住む子供たちも草履ばきが普通で、比較的

長い道のりを歩いて小学校へ通っていたように思う。まして、「峠」と称する割烹宴会場などはなかった。

会長の報告によると、卒業生が一二〇名。その中、物故者が約二〇名、欠席の返事があったのが五〇名、出席者は男二二名、女一八名、都合四〇名であった。後は不明者だろう。

我々より若い年代者に同窓会の通知を出したところ、二〇名しか出席しなかったという話だから、今回の会の出席者は比較的多かったように思う。会場に誰かが、我々が小学校に入学したときに使った『小学読本巻一』の復刻版を持って来ていた。「サイタ サイタ サクラガ サイタ。コイ コイ シロ コイ。ススメ ススメ ハイタイススメ……」が見られた。懐かしい読本である。

既に数年前になるが、ある小学校に取材したところ、学校にランチ・ルームがあるのに吃驚した。我々が小学生の頃には、先ず給食制度がなかった。毎日「日の丸」弁当持参で、冬になるとストーブの回りに弁当を積み、温かい昼食を教室で先生と一緒に食べた記憶がある。沢庵の臭いが教室中に広がり、生徒にきょうのおかずが何であるかを知らせるようになった。梅干し一個が白いご飯の中に埋まっている、文字通り「日の丸」弁当もあった。だから、アルマイトの蓋の真ん中が丸く空いていた弁当箱も珍しくなかった。そんな時代を経験した者にとって、小学校にランチ・ルームがあるのは驚

きである。

「なんで、ランチ・ルームがあるのですか？」

「最近、生徒数が少なくなり、教室が余ったので、それを全校生徒の昼食場としています。食事を執る礼儀を学ぶのにも、好都合です」

という校長の説明であった。時代は変わった。

平均年齢六十七歳ともなると、誰もが何かしら身に傷をもっている。昔、ごんたの○君は二年程前に脳梗塞を患って半身不随になり、今回は杖を付いて参加していた。喧嘩が強かったK君は、半身不随にこそならなかったが、退職後、脳出血を起こし生死の境を彷徨ったと言って、アルコールを一口なめ、人生の儚さを慨嘆していた。身体には異常が見られないので、「元氣そうだね。顔色はつやつやしているし……」というとき、胃瘍が見つかった切ったとか、大腸癌が発見されて手術を受けたという話を二、三の人から聞いた。こんな情景が今後さらに普通になるかも知れない。手術をして悪い所を摘出してしまえば、多重癌が発生しないかぎり長命が続けられる。今は肝がんでも、五年生存率が増えている。腎透析を行えば、たとえ腎不全になっても、命を長らえることができる。昔なら、一年持たないと言われたものも、医学技術の進歩で長生きできるようになった。

『国民衛生の動向』という本を見ると、大正十五年〜昭和

五年（一九二六〜一九三〇年）の平均寿命は男性四十四・八二歳、女性四十六・五四歳である。それが、平成七年（一九九五年）の平均寿命は男性が七十六・七〇歳、女性が八十三・二二歳になった。約七十年の間に、男性が約三十二歳、女性が三十七歳延びている。ロンドンにロイ・ポーターという医学史の専門家がいますが、彼が「変な時代に生を受けたものだ。今ほど健康な時代が會ってなかったのに、今ほど人々が健康を心配する時代もない。イギリス人の平均寿命は確実に延びているのに、人々は自分の健康生活を心配している」と言っている。これはそっくり日本に当てはまる。世の中が平和になると、心配するのは自分の身体のことなのかしら。

翌日、同窓会に出席した学友に偶然会った。彼の言うには、「みんな、飲む量が減ったね。それに、あんまり食べなくなっただ。ようけ、ご馳走が残っていたもの」。そんな人々の集まりが、高齢者の同窓会である。

宴会終了後、柏原崇廣小学校へ歩いて行った。昔、運動場の真ん中に柳の老木があつて、そこに綱を結んで綱引きをしたことを覚えている。小学生が一生懸命綱を引いても、びくともしなかった。カンカン照りの夏の盛りに、その木陰に腰を下ろして、皆が体操をしている姿を見ていた人もある。いまは、柳の木はない。合理化が好きな時代に切ったのだらう。運動場の真ん中の柳の木は邪魔に違いないが、一つの個性あ

る風景ではある。合理が勝ちか、個性が勝ちか、考えてしまふ。学校の裏は山である。昼食休みに、この山を駆けて遊んだ。背の丈以上の木の中を冒険気分が横溢していたのを出し出す。帰りに正面の御殿を伺った。まだ一度も中を覗いた覚えがない。覗くと、御殿の正面上の鴨居に『崇徳廣業』の額が見える。なるほど、これが崇徳の名の原点なのかと、六十七歳になって初めて小学校の名前の由来を知った。

先日、テレビを観ていると、二十六歳の英語教師を殺した十三歳の中学生は、「命の大切さを知るために、擁護院へ送られることになった」とコメントしていた。擁護院送りになくても、幾らでも命の大切さを教えることは出来るのにと考えた。今は言葉だけがあつて、実体が伴わない時代なのだろうか。我々が小中学校の生徒だった頃、飛び出しナイフを見せたら、先生が怖がらないので刺すという発想自体をしたことがない。先生は神様の次に偉い人だと教わっていた。その先生を刃物で殺す、などということは考えられない。

「仰げば尊し」という恩師に礼を尽くす歌は、今も立派な送別の歌だと思っている。

「『でも、しか先生』がいて、先生も生活者の一人に過ぎない」と知ったのは、かなり後のことである。

そういえば、中学生の暴力行為が世情を騒がせて、生徒の刃物所持を先生に点検させる話が一時出た。「えっ、我々

の時代にも無かったのに」と感じた。我々の時代には、鉛筆削りが一般的ではなかった。だから、「肥後守」というナイフをいつも筆箱に入れていた。これを使って綺麗に鉛筆を削るのも、子供の学校生活の一つだった。工作のある日には、切り出しナイフを持参した。時々は怪我をしたこともある。つまり、刃物を常時学校に携帯した。これが戦前の子供の日常である。しかし、担任の先生が子供の持ち物を調べることはしなかった。子供の自由を叫ぶ現代、子供の持ち物をチェックしなければ、自由が守れないのだろうか。小さな自由を推奨して、大きな自由を失ってはいないか。

小学校五年生か六年生の頃だったと思う。映画会があった。戦時中の田舎の学校なので、映画会は滅多にない。総ては忘れてしまったが、一シーンだけ覚えていて。後になって、自分それは『忠臣蔵』の一場面だったと思うが、侍が一人刀を明かりに翳して、「人命は鴻毛より軽ろし」と言っていた。勿論、「鴻」などという字は読めないで、後で先生が説明をして下さったのだと思う。それはともかく、人命が鴻の毛より軽い時代でも、青少年の権利を侵すことは少なかったように思う。戦争は大量に人命を殺戮することを前提にしている。だから、人命は鴻の毛よりも軽く扱ったことは確かだ。しかし、人命を地球より重いとすると現代、一体、子供の自由をどう考えているのか判らなくなる。子供は自然だから、間

違いを起こしやすい。だから、羨が大切である。その羨のもとで、社会生活を送るように導くのが家庭であり、学校である。何でも自由放任の子供を作り、何でも子供の声を聞けと言ひ、最後は文部省に持ち込む態度が民主主義で自由な社会生活か。羨をきちんと子供に体得させて、大きな自由を得るようにすることが大切ではないか。

今度の帰郷のもう一つの目的は、和田小学校を訪ね、何人かの人に会うことであつた。これには、少しばかり訳があつた。昨年『丹波新聞』紙上で始めた新コラム「丹波人NOW」で上高子さんからインタビューを受け、その記事が『丹波新聞』に掲載された。その中で、「私が和田小学校の代用教員として二年生を受け持ったとき、或る双子の兄弟を激しく横びんたを食らわせ、中耳炎を患っていることも知らずにいたが、その双子は後に耳が聞こえなくなつたと聞いた。もし、私の横びんたが原因だとすれば、申し訳ないと今でも思っている」と話したら、それもレポートされ、ある日突然、双子の一人から電話があつた。

「あれは、私です」と言う。「横びんたはあつたし、耳も悪いのですが、横びんたが原因だとは思っていません」とのことであつた。その数分後に、双子の弟の方からも電話があつた。「どうやら、あれは僕です」という話。結局、弟の方だ

と判つた。これが、きつかけとなつて、一度、和田小学校を訪ねたい、出来ればその当時の生徒に会いたいと言うと、双子は計画を立てて、会う算段をしてくれた。

結局、同窓会の次の日、六人の男性が集まつた。その中の一人が、セピア色に変色した写真を持っていて、それを複製して持ってきてくれた。裁縫の先生を中心に、二年生二組の全員が写っている。私は一九才。全員が、頭に飾りを付けて、大声で笑っている。その天心爛漫な風景。その美しさ。まるで天国かと思える子供の情景である。子供は神様だとある識者が言つたが、それはこうした情景を観て言つたのかも知れない。「こんな笑顔が、今の子供にあるだろうか」と誰かが言つた。正に、何はなくとも心からの笑いがある。四十八年前の情景である。この子供たちがいま五十五歳。老眼鏡がないと、この笑顔が見えないと言う。

当時、和田小学校は生徒数が郡内一で、教師も少なかったために、代用教員が必要になつたのだろう。同じクラスが新制中学を卒業したのが、全部で一五〇人だと言つていた。それが同窓会を開くと、約半分の七〇人も集まると言う。同い年の絆が強いと強く感じた。この和田村は面積も広く、長らく村であることを頑張り通して、県下で一番遅くまで村を続けたのは、この和田村だと言う。

双子の一人は、「今だったら、先生は暴力教師だと言われ

ますよ。だって、横びんただけでなく、私はストーブの火箸でごつんをやられたのを記憶していますよ」と脅かされた。

「全くその通り。いまなら、問題になるだろうね」。

酒宴の席で、一人がこんな話を持ち出した。

「先生で覚えていることがあります。魚の缶詰です。昼飯のとき、みんなの弁当の蓋に少しずつ缶詰の魚を置いてくれた。あれが、美味かったのを思い出します」。

本人は全く忘れてしまっているが、当時の生徒の印象には、非常に強烈だったのだろう。二、三人が覚えていた。

「それにしても、学校から帰る時には腹がへってたまらなかった。ところが、いまのように食べるものがない。銭もない。だから、スイスイやイタドリをよく食べた。それに、畑できゅうりを食べた。きゅうりなんかよい方で、ソラマメを生で食べたこともあります」。

「それに、先生は商家の出身だから、教室へ『肥後守』を持って行かれたそうですが、私ら農家には、それを買う金もなかった。だから、親父が鉛筆を鎌で削ってくれていました」。

今は便利で、鉛筆を削るのにナイフを使うこともあるまい。一時、今の子供は鉛筆も削れないという新聞記事を見たことがある。父親が鎌で鉛筆を削ってくれた、その情景はもう二度とみられない。ぼつぼつ小学生にも、一人一台のパソコンを配置する時代になり始めている。字を書くよりも、機械が

代わって書いてくれる。子供と子供のコミュニケーションが、パソコンを通じて行われることになるだろう。インターネットが更に普及するだろう。一体、昔とこれからでは、どちらが幸せな情景なのだろうか。

代用教員の経験をして、子供にものを教えることが如何に難しいかを思い知った。それに、子供は成長するが、それを送り出す先生は取り残された気分が残る。そんなことを考えて、大学でも教職課程を取らず、教師になる道を自分で閉ざした。教師生活は四十八年前のこの一年だけである。

同窓会の次の日の午前中、柏原町母坪（ほつぽ）にある「コモレレ丹波の森」の駐車場で、餅まき行事が行われた。そもそも、私の子供の頃、柏原町に母坪という地名はなかった。新井村の一部だそうで、いまは新井村は柏原町に合併している。ここに、大きなスーパー兼デパートのような商店街ハウスがある。「コモレレ丹波の森」と言う。その創立から丁度二年になるので、それを祝って餅まき行事を母坪地区の人達が行うという。

餅まきに先立ち、母坪地区の会長が挨拶した。「開店から二周年を祝して、午前十一時と午後一時半の二回、八千個の餅をまきます。福引カードの入った餅があります。それを当て下さい。お互いに、コモレレ丹波の森の発展をお祝いしましょう。その後、株式会社「丹波の森ショッピング・タウ

ン」を代表して、私の従兄弟が挨拶して餅まきが始まった。一体、母坪の農家代表がなぜ餅まきなどをするのか。

今から約二十年前、福知山を本社とするスーパーが柏原町に進出してきた。これに対抗するべく柏原町商業振興協同組合が結成された。大資本の攻勢に、田舎の商人が左右されるのを徒手して見ている訳にいかないと考えたためである。二、三の大手スーパーに声をかけたが、どれも進出を拒んだ。結局、「生活協同組合コープこうべ」が賛成して、店舗の三分の二を占めることを約束した。同時に、用地を探し、母坪に決定した。母坪の土地は元農地で、これまで米を作っていたところである。今のところ、「丹波の森ショッピングタウン」は成功している。

ショッピングタウンは、敷地面積約一万五五〇〇坪。その外景は、外国へ来たかと錯覚するようなたゞまいである。アメリカのフェニックスやワシントン南のシャーロックビルなどで、同じような建物を見たことがある。砂漠などに忽然と佇む風景である。壁に大きくモールと書いてあったような気がする。そう言えば、参考にアメリカ、カナダの店を下見したという。覚えているのは、ナイヤガラの滝に近い森の都市だったと、従兄弟は言っていた。アメリカのモールの中は、まるで商店街で、何でも揃うようになっていいる。ここも同じで、中は一方が大きなスーパーであり、一方に様々な商店が

並んでいる。スーパーは「コープこうべ」であって、このために「エコー」というマークを作った。柏原の商店の並びが「コモレ丹波の森」である。私が住んでいる相模原市では見たことのない大きさである。普段は約二五〇〇人の人がショッピングに集まると言う。この日には餅まきイベントもあつて、約四〇〇〇人が店に出入りしていた。

「一体、どこからそんなに多くの人が集まるのですか？」

「中心は柏原町や氷上町などの人々ですが、いまはショッピングが家族ドライブの楽しみの一つになっていますから、篠山や和田山などからも来ます」。

だからであらう。約八〇〇台が置ける駐車場が、日曜日の午後には、ほぼ一杯になった。今はまさにモータリゼーションの時代である。私の小学校時代には、柏原町全体で柏原日赤病院の先生用に自動車一台あったきりである。当時、人力車が主流で、これを追い出すように自動車が配備された。医師の往診に自動車活躍するので、ついに人力車が廃止された時世だった。その自動車は外国車だった。これが動き出すときの排気ガスの臭いが良いので、排気管に鼻先を寄せた想い出がある。

「コモレ丹波の森」を見て歩いているとき、Kさんに会った。私の子供の頃は、柏原町で畳屋さんをしていた。ここでは、絨毯やカーテンを売る大きな店を張っている。売上げは

トップだと言う。

「こんなものが出来ると、柏原の町はさびれてしまうんじゃないありませんか？」

「そうねえ、さびれるでしょうね。だけど、我々がやらなければ、誰かが外から入って来てやるに違いないね。これも、ご時世だから、しょうがないね……」と、Kさんは私に言った。

同窓会を機会に、柏原の町を歩いてみると、土曜日の午後でもあったせいか、人の行き来が少なかった。私が歩くのが町の人には目立つたに違いない。田舎だから、こんなものかなと思ったが、それにしても活気が感じられなかった。道理で、殆どの人はコモレーに行ってしまったている。「昔は、ひやかしの客が入ったものだが、今は冷やかしの客も来ない。それほど、町に人がいない」というのを聞いた。一時、大都市では職住分離ということが言われ、住む家から職場まで混み合う通勤列車で通うサラリーマンが注目された。しかし、今は田舎で商住分離が実現する時代になっているように思う。

柏原町の人口は一万人を越えるほど回復したという。昭和三十―四十年頃、農村人口は全国軒並みに減った。時あたかも経済成長期で、企業は労働力欲しさに農村からの人口集中を歓迎した。多くの人が大都会へ向けて集まった。その人た

ちが、少しずつ高齢化してゆく。だから、いま大都市周辺は高齢者対策に四苦八苦している。その高齢者の少しが、大都市に住んでいても、もう余り有利さがないと思い、Uターン現象を起こしているのだろう。若い人が、都会に出なくても、田舎で十分に生活できると考えたのかも知れない。柏原町だけが、その恩恵に少し浴しているらしい。

「となると、一体、大都市とは何だろうね？」

私は従兄弟の息子に問うた。

「いまは、大都市はおろか、ワシントンのニュースもロンドンのニュースも、都会と同じように入ってくる。何も大都会に生活しなくても、情報は入ってきます。まして、ボーダレスと言われる時代になれば、大都会のメリットは何ですかね？」

「大都会は人が密集して住んでいる場所に過ぎなくなるね」。

同窓会を契機に、故郷とは何だったのかを考えてしまう。

水上郡の開発や発展を望んだ都会暮らしの人が、思い描く故郷は心の中にしかないのだろう。あるのは、ただ人と人の繋がりだけかもしれない。



丹波の遺跡、旧跡を訪ねる

— おさんの森、水分れ、そして恋の舞台 —

谷 口 捷 (氷上町)

本年は八月に還暦祝い幸世中学校同窓会があり丹波に帰省挨拶をさせられて「恩師や還暦を迎えられた先輩の方々の前でおこがましいが……」とやってみない響きをかっしてしまう始末で、還暦ということには実感がないが、仕事だけは終りにしたい気持でいるこの頃である。再び十月十一日に還暦祝い柏原高校八回生同窓会が行われたので、この機会に友人より以前から依頼されていた丹波の遺跡、旧跡訪問を行うことにした。同窓会の二次会以後を失礼して、柏原駅に友人を迎えに行き念願の実行である。

まず最初に友人指定の一つである近松門左衛門の「おさん茂兵衛」縁の地へ行き、昔の山陰街道があまりにも細いのに驚く。また、そのお墓は春日町にあることを後ほど知る。日も暮れ始めたその場所で、友人が「福知山線で眺めていると水の流れが変わったが……」と言う。さすがに大学教授の観察力は違うとお世辞を言いながら、説明するまでもなく「水分れ」に向かう。この場所は日本でも珍しく平地での分水嶺

が存在する。このことについては、以前から度々『山ざる』編集委員の徳田氏が兵庫県人会誌に詳しく紹介されていたように記憶している。現在は自転車で高校通学していた頃と大違いで、素晴らしい公園が出来ており、友人もその珍しさにびっくりした面持ちであった。

その夜は氷上町南油良の兄の家に泊まり、翌朝早く散歩がてら、これも友人指定の一つ川田順「老いらくの恋」の寺に行く。私の育ったここ南油良は、当時より五十軒に満たない小部落であるが、不思議なことにお寺が二つもあり、天台宗明源山観音寺、通称下寺は廃寺になっていて、そこは当時、私達子供の良い遊び場であった。最近、兄の所に託された言い伝えの書面によると、養老年間、すなわち七百年代に造られたものである。丹波新聞社刊『ふる里の寺』によると、歌人武将源頼政の恋の舞台でもあると記されている。古いものの片鱗が残っているものの、明治維新の神仏分離政策による廃仏毀釈の影響か、残念ながらほとんど処分されているようである。

このような場所が司馬遼太郎作品にも登場する。有名な住友財閥の実業家であり、高名な歌人である川田順と京大教授夫人の恋の一舞台であった。そういえば一年ほど前の週刊誌であったと思うが、女性の方は鎌倉でまだ御健在との記事があり、「私の宿命……」の談話があったように記憶している。

さらに思い出すと、昭和二十三年、私が小学五年生のある時期突然見知らぬ人達がこのお寺に住み着き、遊び場を失ったことがあった。同級生の話によると小生はわんぱくで、山門をよじ登り唾を落としたりして、いたずらしていたのと、と、それに窓から見えた立ちション姿の人がそのような偉い人と思わなかったそうである。それが全国的に有名となった舞台とは当然知る由もなかった。余談だが五月に亡くなった叔父大槻隆の書き残したものと、巢鴨の拘留所での短歌の師が川田順であることが記載されていて、人の不思議な縁を感じたことでした。

次に、兄の車で大石内蔵助の妻おりくさんが伏見より但馬に行く途中に立ち寄った謂れの碑がある天王坂を通り、NHK大河ドラマにも紹介された春日局縁の興禅寺に行く。資料によると、明智光秀の丹波攻略後この地方を治めるため、重臣斉藤利三が黒井城に入り、その下館の興禅寺を陣屋として約三年住み、天正七年にお福さんが生まれたとなっている。兄の話によると、以前には「お福うぶ湯井戸」とか「お福腰掛け石」の案内札が立ててあったが、それらは作り話をはばかったのか無くなっているとのこと。確かに最近知人より、春日町生誕説に異論を唱えている女性作家がいると聞いて、その説をどこかで拝見したが、それは戦城に家族を伴っているはずがないとか、里帰りをして産んでいるはずとかの内容

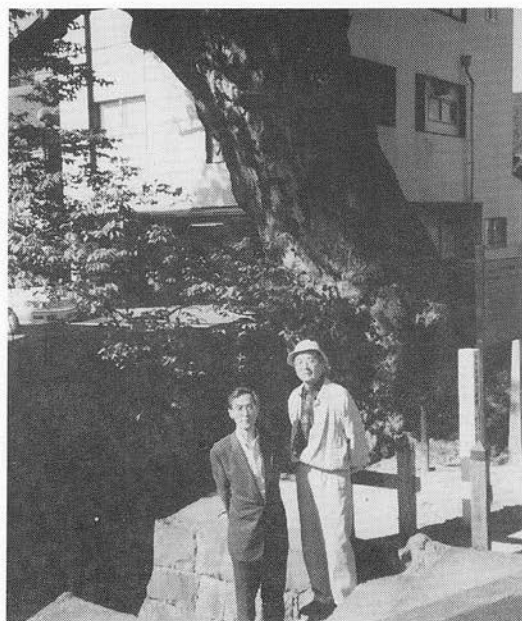
で、専門でない私でも気にする必要がないものと思われる。すなわち上記資料によると、戦乱の終わった後だし、何で知ったかは忘れたが、その当時は里帰りの習慣がなく、織田信長の奥方は嫁入り後一度も斉藤道三のもとに帰ったことがないそうである。いずれにしろ、このようなことは、私が長い間付き合ってきた数学と違って少しぐらい不正確でも土地の人々に夢を持たせ保存される方を私は歓迎する。

ここで、また一つ思い出したことは、学生時代お世話になった京都の下宿に近い所に、徳川家康の菩提寺である真如堂があり、最近懐かしく散歩していて、徳川家康との関係より当然である春日局が植えたという桜の木があり、そのすぐそばには徳川家康とは関係のない斉藤利三のお墓があるのを発見したことがある。このことだけでも両者の関係が浅からぬこと明らかと思う。

次に、そのすぐ近くにある「七日市遺跡」を探す。東京では十月三日の日本経済新聞に記載されて驚いたのだが、非常に広い範囲で発掘されており、最近まで二万年前に作られたとされた石器が二万五千年前の地層の中より大量に発見されて、しかも大量生産の技術で製作された形跡があるとのこと、これにより石器時代の日本の歴史が書き直されなければならぬそうである。それに、その石の材料がサヌカイトと言われるものであると記されている。この石の名は後ほど

再度聞かされることとなる。

再び柏原町に入り、八幡神社、木の根橋を案内してから織田藩邸跡に到着する。織田記念館でしばし信長以後の弟、子孫の時代を思い浮かべる。その横には俳人田捨女の記念館も出ていて、文化遺産が大切にされていることを感じ、うれしく思った次第である。その中の家系図に出てくる田健治郎氏のことは『山ざる』誌にもしばしば紹介されているが、私の住む狛江市の伊豆美神社の狛犬にもその名が残されている。



友人と木根橋にて

ここでふと思ったことは、柏原町出身には立派な自然科学者もおられる。特にお隣同士がともに文化勲章受賞者の農学者安藤広太郎博士、物理学者小谷正雄博士の生誕の家に足を延ばしたが何も残っていない状態である。以前、金沢に行った折見たのだが、金沢市立ふるさと偉人館には名誉市民達の資料が保存されていたが、柏原町では将来上記の人達のがどのように扱われるか気になるところである。立花隆さんの言葉を借りれば「とにかく残しておくという決断」もこの際必要ではないだろうか。

この後、南隣の山南町に向かう。ここにはやはりNHK大河ドラマに紹介された石倉寺があり、足利尊氏が戦いに敗れて再起を期した城として有名である。ここのお寺の状態は村の寺総代の人達により素晴らしく保持されているようで、立ち寄った休憩所でおいしい栗や柿をご馳走になり、友人はおみやげに頂いていた。ちなみに、このお寺は現柏原高校校長堀井隆水さんが住職だそうである。なお、このお寺には、石器時代のものが保存されていて、その材料は近くの山から採れる石サヌカイトであるとの説明を受けた。その地名が岩屋と言われるゆえんであるのかと思い、遠い昔において七日市遺跡との結びつきが想像される。

ここから再び「子午線の通る町」と案内されている氷上町に入り、丹波の正倉院と呼ばれている達身寺に向かう。ここ

は明智光秀が丹波攻めのとき、僧侶達が多く、の仏像を山より谷に投げ捨てて戦火より守ったと伝えられているお寺で、特に鎌倉時代初期の多くの国宝級仏像があることで全国的にも類を見ないと言われている。実際多くの仏像が無造作に置かれていた。そのすぐそばにある町営で、宿泊施設もある、やすら樹”で食事をし、松茸の香りのする土びん蒸しを注文、友人は一言「安いね」であった。

この日は当地でコスモス祭が行われていた。一面のコスモ



達身寺にて筆者

ス畑を眺めながら最後に常楽にある高山寺を訪ねる。上記の“ふる里の寺”によると、真言宗大覚寺派別格本山弘浪山高山寺とあり、奈良時代（七六一）に法道仙人が開基したと記されており、特に源頼朝との縁が興味ある。このお寺がそうであるように、これまで訪ねた所はことごとく、昔は山頂あるいは山中にあったようである。今度訪れるときは山登りをして真の旧跡を見たいと思ったほどである。

以上で帰りの時間を気にしつつ柏原駅に向かったが、このように貴重な遺産がほとんど観光化されずに残され保存されていることに感謝の気持がする。古いものを破壊し廃棄することは簡単である。保存し後世に伝えることには多くの人々の苦勞があるはずである。兄の家にも残念ながら手入れ充分と言えないが槍、刀剣類がある。この前の戦争の時寺院神社の銅板、釣鐘等とともに刀剣類は供出させられたことを幼少の頃であったが強く記憶している。その結果、鉄砲玉等に使われ、失われたものが多くあったことと思う。その反面、軍の中にも当時の常識を超えた判断の出来る人がいて、銘のある重要なものは保存し、戦後供出した人に戻したものであると聞く。

このように、その時代の常識に流されない政策を実行出来る人が経済、環境問題に悩む今こそ待ち望まれていると思う。多くの人達の努力によって残されたものを、次の時代に伝え

ていくことは、我々の義務ではないかと考えさせられる訪問であった。

今回は青垣町、市島町、それに水上町北部を訪ねることが出来なかったが、まだまだ多くの行きたい場所があり、次回が楽しみである。

(97・10・20記)

後記 『山ざる』誌(第28号)で上記と関連する記事を拝読した。

ふるさと研究の中に、水分れに関しては「日本の分水界と水分れ」久保良雄氏、春日局に関しては「丹波黒井城の姫君たち」前田武彦氏がある。

なお水分れに関しては他でも記載されている。

また一九九八年二月に本屋に行くと、谷崎潤一郎賞受賞作映画化決定とあり、辻井喬著『虹の岬』が中央公論社より単行本及び中公文庫が発売されていた。これは上記「老いらくの恋」の物語であり、テレビでは放映されたことがある。

戦中、戦後の柏中時代

藤井 宏次 (黒田庄町)

紅顔の美少年(?)達も今では古稀に手の届く年となり、同級生も殆ど第一線から引退している。徒然なるまゝに、多感な青春時代を送った柏原の思い出の一端を綴ってみた。

私達が(旧制)柏原中学に入学した昭和十八年は、まだ第

二次大戦の華やかなりし頃で、教室には「撃ちてしまむ」

の標語が掲げてあった。小学校(当時の国民学校)と異なり、

教科毎に担当の先生が代わるのが新鮮に感じられた。ABC

の三組の編成で、A組は葛谷先生(ボロさん)、B組は荻田

先生(瘦せ狼)、C組は眞田先生(仇名は忘れたが、やまの

研究家)が担任で、私はB組であった。又、軍事教練のため

の配属将校(老若二名)も威張っていた。

週一回の日の丸弁当日には、全体师生が机の上に御飯と梅干

一個のみの弁当を開けて、担任の先生が調べて廻ったり、午

前中の授業の間に全体师生上半身裸で校庭に出て、寒い日でも

タワシで乾布摩擦を行った。

戦時中ではあったが、幸いなことに最初の一年間は学業に

専念することが出来た。厳しくも老練な荻田先生の英語、カー

キークルクレコイなどお経スタイルの葛谷先生の文法、

超瘦身の山鳥先生のか細い声での国語(鳥の鳴声口演のタイ

トルを進呈)、竹中先生(ヤキン)の代数、吉田先生(デス

さん)の幾何、山本先生(チャイナ)の習字、カン高い方言

の渡辺先生(カンチャン)の工作、若く元気一杯の松尾先生

(ポンちゃん)の体操等思い出は尽きない。

二年目に入り戦況は日々悪化を辿り、都会の燃料不足が深刻となり、学校にも薪炭増産の命令が下り、私達は鞆を置いて

て毎日鐘ヶ坂方面の山に大鋸、大斧、縄を持って通った。確か一人一日薪二十把がノルマだったように記憶している。大変苦しい作業の連続であったが、暑い夏の日の岩清水のほかに甘い冷たさは今でも忘れられない。

米軍による本土爆撃も日々激化し、三年目の四月からは学徒動員によりかねてから学校に疎開していた東洋ベアリングの工場で工員さんと共に飛行機の部品の生産に当たった。夕方七時から翌朝七時までの徹夜作業で、毎夕工場長の「おはよう」の朝礼(?)で始まり、夜食は工場内であったが、防空幕に閉ざされた工場内部が高温で弁当がすぐ腐るので、柳行李の弁当箱に御飯と梅干が毎日の唯一のメニューであった。

工場動員の間には軍事教練も続けられた。当時、敵の落下傘部隊の降下が予想されていて、唯一の武器(竹棒の先に鎌を結びつけたもの)で敵兵の背後にしのび寄って首をかくというものである。自動小銃と鎌では戦う前から勝敗は明らかであるが、それでも私達は真剣に訓練に励んだ。

昼間は寝て夜働くというパターンの生活によりやく馴れた頃戦争が終結した。

日本の歴史始まって以来初めて敗戦を味わった日本人はすべて虚脱状態に陥り、なすすべを知らなかった。九月になって米軍の本土進駐が始まり、マッカーサー元師の厚木到着、GHQの設置等を通じて私達の見たアメリカ人は戦時中に教

わった「鬼畜」ではなく、むしろ紳士的な人間で、戦中、戦後のどさくさにまぎれて邦人婦女に暴行したり、金品を強奪した某国の軍隊とは違うことがわかってきた。

日米会話の本が飛ぶように売れ、ラジオで平川唯一先生のカムカム英語の放送が始まったのもその頃であった。

精神的には一応落ち着いてきたものの、食糧不足は依然深刻で、闇買いを拒否した判事さんが栄養失調死されたり、全国いたるところで餓死者が続出した。

米国の占領政策の一環として、教育制度も大幅に変革され、六三三制の導入、男女共学の実施等が次々に行われた。ある日、米軍のジープが学校に来て男女生徒にフォークダンスの講習を実施するという。当時は「男女七歳にして席を同じうせず」の習慣が残っていて、男子生徒はすべて拒絶反応を起こしたが、体育の植村先生の「校長の責任問題になるのでは非共やってくれ」との懇請を受けて、しぶしぶ同意した。レコードプレイヤーから流れる「おおサンナ」の軽快なメロディに合せて、米国人の指導で初めて女生徒達とフォークダンスを踊った。明るいアメリカの雰囲気味わったような気がした。

教育制度の過渡期のため、私達の卒業は三年にわたっている。即ち昭和二十二年に旧制中学四年で、二十三年に同五年で、二十四年に新制高校三年(第一期生)である。何年か前

に私達柏原の同級生の関東在住者でふみよ会（二十三回会）を結成して年に何回かは旧交を温めているが、戦中、戦後の激動の日本を共に生き抜いてきた仲間とは、いつまでも懐かしいものである。

映写室からみた想い出のシネマ

坂 本 重 雄（柏原町）

終戦直後に中学・高校生活を送った世代の人々にとって、映画が趣味だった人は少なくない。私もその一人である。同級生達も柏原映画劇場を第二校舎と呼んでよく出かけていた。中学一年の夏に終戦を迎えたが柏原中学（旧制）の生活にはなじみず、家業の映画館経営を手伝い高校一年までは主に映写技師の助手として働き、その後は番組編成の仕事を手伝っていた。そのため人一倍映画を見る機会が多いと友人から羨ましく思われたようだ。私の場合、多くは映写室の窓から見るわけであり、事故なく無事に終わることや興行成績（観客の入場人員）を気にしていて映画の鑑賞と言えるものではなかったように思う。青春時代を過ごした丹波柏原の生活を回顧するとき、どうも映画と当時の家業を取り巻く状況が不可

分の形で思い出される。

一、「素晴しき日曜日」（東宝、一九四七年）は、所持金三五円の貧しい婚約中の恋人の二人が、安アパートを探し歩き音楽会にも入れず、男のアパートは雨もりする部屋で、戦後の貧しさが白黒映画で写し出される。空腹をかかえて日比谷の野外音楽堂にたどり着き、男は音楽会で聴けなかった「未完成交響曲」第一章のコンサートタクトを振り、二人しかない夜中の音楽堂で空想の音楽が響き渡り聴衆の拍手が次第に大きく聞こえてくるというのである。当時、物質的にはどん底生活を強いられながら精神的な喜びを渴望した時代の日本人の姿を思い出す。この映画はストーリーや画面が暗く興行成績は全国的にも良くなかった。でも一九四七年度ベスト第一位作品に選ばれ、数年後に再度見たときには優れた作品だと感動した。

終戦直後の数年間は、戦前の古いフィルムが多くカーボンで焼いて光線を出していたためフィルムが切れると火災の危険が大きかった。当時は電力不足などで停電が多く、その間は我慢して待ってもらうか、長引くと料金を返すしかない。「素晴しき日曜日」は音響効果を意図した作品である。安アパートでの雨もりの雫の音、ラストの空想のコンサートの場面などで録音機が部分的に故障してしまい、観客を混乱させ

てしまった。娯楽の少ない時代で映画はとても人気があり、映写技師も張り切っていたが、古い型の映写機、よく切れる古いフィルム、フィルム運びなど苦勞は少なくなかった。

二、「仔鹿物語」(一九四九年)は、南北戦争のあと、フロリダの原始林を開拓する貧しい農業家族の物語である。グレゴリー・ベック演ずる父親を助けて自分も懸命に働く少年が、父が殺した鹿の子を飼育する。ところが子鹿が成長して畑を荒らすようになり、父親が子に自分で鹿を殺せと命じ、それに少年が苦しみ、その苦悩を自分で乗り越えた少年を父親が褒めるというクライマックスである。独立自尊の開拓精神を描いていて、日本では民主主義的な啓蒙価値の豊かな健全娯楽映画で、この頃ではまだ珍しいシネマカラー作品だったことからたいへん好評でもあった。

当時の映画の入場料は一〇〇円以下が通常であったが、興行税は国税第四位を占め、一五〇%の税率であった(一〇〇円のうち、税金六〇円で映画館は四〇円受領する)。この映画は満員の盛況であったが、こういう時をねらって税務署(この直後、国税から地方税に移管)の職員が入口で入場者を数え税収の確保をねらい、業者側はそれほど信用できないのなら税金分を自分で徴収すればよいではないかと押し問答になり対立する。このトラブルで映写室にいても落ち着かず、

この映画はほとんどフォロウできなかった。一九四七年八月、介護調査でロンドンに滞在したとき、偶然、ホテルで「仔鹿物語」を見たが、ダイアナ妃の事故の報道で、懐かしい名画を最後まで鑑賞できなかった。

三、「ジギル博士とハイド氏」(一九四〇年封切、私が柏原で見たのは一九五二年)

人間の体内にひそむ善悪の二重の人格については中学・高校生時代に興味深いテーマであり、この映画の原作を翻訳や英文で読んだこともある。私の好きな俳優スペンサー・トレイシーが二重人格者を演じた。善悪二つの人格を使い分ける薬が次第に効かなくなり、ジギル博士が無意識のうちにハイド氏に変貌する場面のすごさを思い出す。

この頃、私は映写技師の助手の仕事は卒業し、座席に座ってこの映画を鑑賞したが、翌朝、助手役のS君がこのフィルムの紛失に気づいた。当時各地で頻発した盗難事件(近隣のアジア諸国へ密輸出されたようだ)を体験し、当時の自治体警察のお世話になった。一九四七年制定の警察法は新憲法九十四条を受けて自治体に警察権を認め、国家地方警察と自治体警察が並立した。人口五千人以上の市町村、当時の柏原町にも公安委員会のもと町警察が設置されていたのである。

事件の前夜、映画の最終回が始まって三〇分もたった頃、

数人の見慣れぬ旅行者風の男性が入場した。夜行列車待ちの客と思われた。国家警察を退官したH刑事が町警察の新任警官として捜査を担当し事情を聴取した。家業の仕事で小学五年生頃から戦時下の警察署の建物に出入りしていた私は取調べの現場を見ることもあり、警察は怖いところという印象が強かった。このときのH警官は物腰の柔らかそうな高齢者に見えた。しかし落ち着いた態度で関係者から事情を聞いたあと、あちこちの交番などへ電話をかけ情報を蒐集しはじめた。当日の早朝、石生の水分れ橋から黒井方面への山沿いの間道を重い荷物をかついで急ぐ男達が確認された。当時の市島町内で荷作りをしたのち市島駅から姫路駅へ盗難フィルムが発送が突き止められ、犯人の一味が姫路駅で逮捕された。この自治体警察はその後、町の財政にとって負担となり、兵庫県下では川西町に始まり柏原町は三番目に町警察を廃止した。一九五四年新警察法により自治体警察は都道府県警察に改組された。柏原町警察を想い出すと、公務員には資質や能力以上に「誰のために働くのか」という倫理感、責任の自覚が要望されるように思う。

青春時代の映画を懐かしく回顧すると、その鑑賞を通じて得られた知識や教養の大きさに感謝せざるを得ない。この映画も一九五八年のピークを境に観客数は低下し、次第にテレビにとって代わられていったのである。

円通寺の思い出

藤 田 玲 子（旧姓佐竹・水上町）

私の在所は旧幸世村、現在は水上町御油です。近くに円通寺という大きなお寺がありますので、昔は多分、灯明の油を生産していたのではないのでしょうか。

子供の頃、一面に続く菜の花畑や、れんげ畑の中にかくれて遊んだことが思い出されます。敗戦は小学校二年生の時でしたから、食べ物や遊び道具もあまりなくて、それでも陣取り、かくれんぼ、缶蹴りなど外が暗くなるまで遊びほうけていました。特に、お寺の庭や縁の下は格好の遊び場でした。

現在、埼玉の人間市に住むようになってからも年に一度か二度、丹波に帰りますが、このお寺に行くのが楽しみの一つなのです。

いつも同じ道を歩いて行くのですが、季節や朝夕の時間によって、山や田んぼの色がそれぞれ異なって見えるのです。

朝早くまだ山々が霧に包まれていたのがだんだん晴れてくる様や、夕暮れ時の景色は水墨画の世界にいるようです。季節は田植が終わった六月頃がいいですね。お寺の参道入口にある八重桜の前を右に入ると、近ごろ句碑の道というのが出来

ていました。

先ず目に入ったのは、近所にお住まいの方で

円通寺の紅葉借しみて妻遠し

種二

高校三年間が自転車通学だった私は、当時、自転車屋さんだったおじさんにパンクの修理をして頂きました。またムシが悪くて空気が抜けると、空気差しを借りにお店に行きました。あの頃の店先の様子が目に浮かび、お元氣だった奥さんのお顔を思い出しました。

行く秋の名残りのもみじ 見むときて

客まばらなる 山道下る

主

生徒達がヌシさんと呼びしていた足立主先生です。漢文を教えて頂きました。内容はすっかり忘れてしまっているのにもかかわらず、出席を取られる時の先生のお声は今も私の耳にしっかり残っているのです。円通寺の紅葉に心を残しながら、帰って行かれる背姿が目に見えるような気がしてなりません。

参道には、所々に石仏が置いてありますが、登り切った所に大きな一本杉があり、その向うにかなり深い蓮池があります。その手前を左に進みますと、突きあたりに大きな石段があります。

紅葉の頃は、ここから眺める景色が最高で、また池に映る

紅葉は、いつまでも見飽きないほどの美しさです。

石段を登ると左側が鐘つき堂、広い庭の右側が庫裡になっていて、その次に方丈の間、本堂とは広い廊下でつながっていったように思います。

また石段を登らないで、下に向うと、両脇に大きな仁王像が建っています。そのすぐ近くに、赤御影石の碑があつて、(尊氏公の第四子が円通寺の開山と承り)

室町の 堂宇の跡や 紅葉寺 小鼓子

尊氏忌 さかんなりしと夫に聞く 桑子

子供の頃に聞いた話では、元の円通寺は、明智光秀によって火がかけられ、焼けてしまったということです。四百年以上前のことで、今あるのは、その後再建されたものでしょう。立派な仁王さんに目玉がありませんでした。純金で出来ていたそうで、泥棒に持って行かれたのか、あるいは、戦争が激しくなった時、国へ供出されたのか、よく分かりません。

威勢のよい仁王さんだけに、睨みが利かないのがちょっとあわれに感じます。

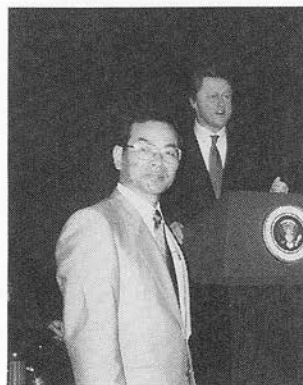
私は、四人兄弟の三番目で、小学三年頃まではひどいおてんばで、人のいうことを聞かなかったのでしょう、父が、仁王さんにすぐ来てもらおうといっていたのを覚えています。その父も亡くなって十年近くなりました。

主人は市島町の出身で、その母は現在、八十五歳（柏原出）です。食事の時はよく丹波の話をして昔のことなど懐かしんでいます。

海外雄飛を夢みて

木下 聰（市島町）

先日、久しぶりに父母のお墓参りのために丹波（市島町与戸）に帰った。福知山線で乗り降りする若者たちの服装やヘアースタイルなどのファッションは都会の若者たちとあまり変わらなくなっている。昔と変わらぬ緑豊かな山や水田、すっかり様変わりして近代の建物もある家並みを車窓から眺めな



がら、海外に雄飛することになって通学の車中で英単語を覚えていた柏原高校時代を懐かしく思い出した。

私が国際関係の仕事をするために夢をいadakようになったきっかけ

けは、三輪小学校の卒業式の祝辞で例年のごとく口角泡を飛ばして、「丹波は狭い山奥だ、世界は広い、広い世界に雄飛せよ」と熱弁を振るっていた村長の言葉かもしれない。あるいは、若い頃日本郵船の社員として外国航路客船に乗っていたかっこのいい叔父の写真を見たり、話を聞いたりしていたせいかもしれない。

山東中学校の英語教師が田舎の中学校には珍しくハイカラで、アメリカ人との文通を指導してくれるなど英語教育に熱心だったお陰で英語好きになった上に、書道の先生が「一芸に秀でよ」と卒業アルバムに達筆で書いてくれたせいかもしれない。将来海外に行くためにはどんな大学に進学するのがよいか、商船学校か外国語大学かなどと、二つ違いの兄と両親の農作業を手伝いながらよく夢を語り合っていたものである。

文系の大学を受験するとなると物理などはほとんど勉強しなかったのでテストの答案が書けず、その代わりに作文を書いたりしたこともあるが、幸い温情あふれる先生に恵まれて無事単位を頂いた。

このような次第で、法律・経済など実務教育に力を入れていた神戸市外国語大学に入学した。昭和三十六年に住友電気工業(株)に就職してから輸出業務や合弁会社設立交渉などずっと国際関係の仕事をしてきた。その間、欧米先進国を中心に

東南アジアや南米など五十回余り出張する機会に恵まれ、少年時代の夢を果たすことができた。

海外生活体験として最も印象に残るのは、ニューヨーク駐在である。当時は一ドル三百六十円の時代で海外渡航者も少なく、海外赴任の際は万歳三唱で見送られる時代であった。初めて乗ったジェット機の窓外に広がる雄大な雲海を眺めていると、入社二、三年で一人海外赴任する不安も消し飛んで、よしやるぞと勇気が湧いてきた。ニューヨークに到着し空港からマンハッタンに向かう高速道路から見た山のようにそびえる摩天楼に沈む美しい夕日の輝きが今でも鮮やかに浮かんでくる。あの時の感激は生涯忘れないだろう。

一年半足らずの駐在であったが、主要な都市や企業を訪問して見聞を広め、いろいろな人種が入り交じってそれぞれに活躍している個性的なアメリカ人たちに接することによって、丹波の山猿でもそれなりに個性を発揮していけばやれるのだという自信をもつことができた。帰国後、日本の高度成長と共に会社の事業も発展し、外国の企業と契約交渉をする機会が多くなったが、米国駐在は非常に良い経験になった。

国際的企業競争がますます激しくなり、ビジネスにおいて特許権など知的財産が重要視される昨今、その分野で今までの経験を生かしたいとかねてより考えていた。

昨年五月に六十歳で定年になった直後に、幸いにも、特許

申請など知的財産の管理を専門とする子会社が新設され、現在はその会社で外国特許出願関係の仕事をしている。

この会社も定年になった後は、仕率関係で蓄積してきたものを集大成するか、好きな小説を見つけてライフワークとなるような翻訳をするのが夢である。ベストセラーになるような翻訳をするのは果たせぬ夢だろうが、せめて自分の子供たちや親戚、後輩、知人などに何かの形で残せるようなものにするのが夢である。

丹波への思い

山口 和久（氷上町）

丹波（氷上町北野）にて昭和二十六年三月三十日生まれました。そこは日本で一番低い分水界でとても有名です。

家は農業をしていますので、私は小さい時からよく農作業の手伝いをしました。その頃は田鋤きは牛を使って行っておりました。うちの牛は乳牛で、通常は乳搾りを行い、田鋤き時には駆り出されました。乳牛は本業でない田鋤きをやられるので、言うことをきかないことが多かったようで、おやじがよく牛の尻を蹴飛ばしていたのを覚えております。「えーい、くそ。」牛がしっぽを振り蠅を追っ払うと、濡れた

しっぱからたんばの水がおやじにはねておりましたっけ。

さてさて農作業はなかなか重労働だったですね。あの頃、家には牛、豚、鶏、山羊、猫、犬、兎を飼っていました。よく猪が畑を荒らしていましたね。たまに狸もおりました。丹波はまだまだのどかでした。田植えはすべて手植えで定規を使って丁寧に縦横一直線に植えておりました。蛭を菜種の穂で採りました。

私は稲刈りでもとても痛い思いがあります。稲刈り用の鎌は刃にぎざぎざがあるのですが、小学低学年の頃、その鎌で稲を握った左手の薬指の第二関節をガリガリと切ってしまったのです。「ノノノ」声がないが血がばたばた出てきました、なんと指の骨が見えていました。いまでも4センチの切り傷が残っています。ああ、痛かった。

氷上中学校卒業後、十五歳で故郷丹波を後にしました。昭和四十一年、新学制五年目の国立明石工業高等専門学校に入学しその学生寮（明石市魚住）で学生生活を開始しました。なかなか勉強以外には楽しいことが多い時期でした。その頃魚住の学生寮の回りはたんばばかりでした、しかしそこにおける農業は丹波よりも機械化が進んでいたように記憶しております。私は高専では機械工学を勉強しました。

また友達三人とエレキバンドを組み、ザ・ベンチャーズを演奏して楽しんでおりました。ちなみに私のパートはベース

ギター。♪テケテケ♪

しかし田植ええた稲刈り等農繁期には勉学の傍ら明石から加古川線・谷川を經由して丹波（福知山線石生）に帰り稲作の手伝いをしたものです。稲こきは発動機と脱穀機をベルトでつなぐタイプでした。発動機のエンジンをかけるのが私の役目、なかなかエンジンがかからなかったのでした。ああの頃は稲木に稲を乾していました。稲を稲木からおろして脱穀機に送り込むのも私の役目でした。脱穀の後はとても全体がかゆかった。籾を乾燥させた後は脱穀機にて脱穀し俵に詰めていました。ところで学生生活は五年間で無事終了し高専を卒業致しました。

就職は二十歳で清水建設株式会社に決定しました。まず東京本社に出社し（昭和四十六年）それから各地を転々といまして建築の現場施工を行ってきました。東京を振り出しに広島、松江（出雲大社で結婚）、また広島、再び東京（立川）と今でもこれまで十年間に施工した建築物がたくさん残っております。

ところで（昭和五十七年八月）フィリピンに私的旅行をいたしました、そこでの田園風景はなぜか丹波と非常に良く似ていました。それは田鋤きを牛（水牛でしたが）がしていたからです。のどかな田園の田鋤きは二十年昔の丹波にそっくりでした。また中近東のイラク（バグダッド）、マレーシ

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られています。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しております。

- ①ふるさと随想▶ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況／文芸
- ③インフォメーション▶展覧会／各種催し／同窓会／本の紹介
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。
▶ふるさと研究／ふるさとの祭り／ふるさとの民話と伝説
▶わが師を語る／わが出発の時（ふるさとを離れる時）
▶丹波を撮る（帰郷の際に撮ったスナップ・ふるさとでの思い出の写真）

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成11年8月20日です。

原稿枚数：400字詰用紙4～5枚程度

送付先：〒104-0044 東京都中央区

明石町2-16-206

(株)ホンゴ出版内

『山ざる』編集部

TEL 03-3248-6625

FAX 03-3248-6626

ア（クアラルンプール）、シンガポールにおいて十一年間建設工事を行ってきました。その中でバグダッド近郊は遊牧民族の街であり日本との関連はみられなかったのですが、東南アジアのマレーシアにおける農業は日本のそれを思い出させるものがありました。

その頃（平成四年）ネパール（カトマンズ）に家族で私的旅行をしました。その山河は丹波の景色そのものでした。また電気のないカトマンズの山小屋へ行きたいと思っています。平成六年、やっと海外勤務最後のシンガポールでの仕事

を終え日本（東京）へ帰ってきました。

先日（平成十年）五月ゴールデンウィークに丹波に帰り、たんぼにて機械田植えを手伝ってきましたが、昔の田植えの風情がなくなりました。また水上にはゆめタウン等がで、都会と変わらない生活ができます。故郷は遠くにありて思うもの。私も子室に恵まれて、寧々（広島生まれ）、藤吉郎秀吉（兵庫生まれ）、愛々（東京生まれ）、茶々（シンガポール生まれ）の四人で、今後とも我々の故郷を見守って行きたいと思います。

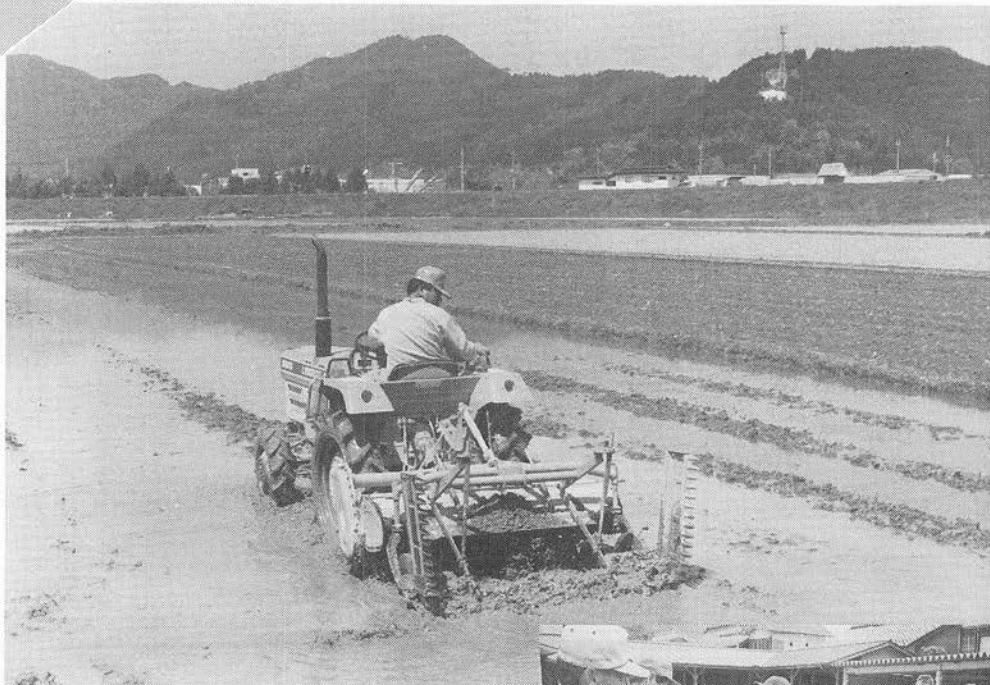


丹波のフリーマーケット
（丹波の森公苑）



コロナワ?で商品製造中の
アーティスト集団SORAの
皆さん（丹波の森公苑）

丹波を撮る



最近の苗代づくり (柏原町田路)

できたぞ温泉 (柏原町田路)

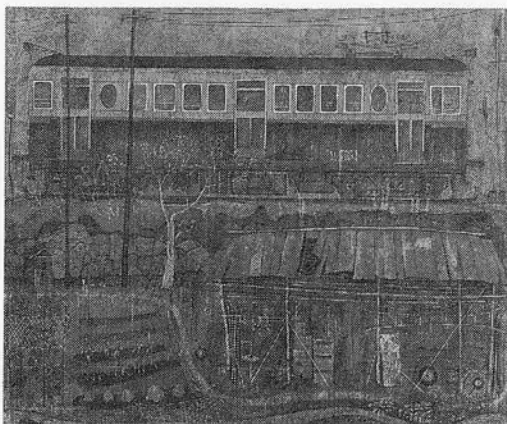


氷上郡子牛品評会
(氷上町石生家畜市場)



撮 影
徳田八郎衛

近況・エッセイ



田島周吾「電車と赤い屋根」
(青垣2001年日本画展 優秀賞)

ノールウェイ紀行

生田清弘(柏原町)

ノールウェイはスカンジナビア半島をスウェーデンと背を合わせる形で構成し、その西側をバレンツ海から北海に至る南北に細長い国である。北緯約五七度から七一度までを占め、ほぼアラスカと同緯度で、国土の三分の一が北極圏に入っている。なので寒いという印象は否めないが、メキシコ湾暖流の影響を受け、わりあい温暖な気候に恵まれ四季の変化もはっきりしているという。

また、この国の八三%が山岳地帯、耕地に至っては僅かに三%しかないことから人々の関心が海に向けられるのも当然といえよう。

ノールウェイの海岸線はフィヨルドを含め二万一〇〇〇キロメートルにも及び、この海でニシンやタラがとれ、古くからヴァイキング料理にも欠かせない保存食として重宝され、また南ヨーロッパの塩と交換するための重要な輸出品でもあった。つまり、漁獲高の増減は交換する塩の増減につながり、人々の生活に密接なかわりがあったのだ。

十世紀から十三世紀にかけ、ヴァイキングはこの海を利用

して、アメリカやヨーロッパ各国の広範にわたり侵攻、略奪を重ね恐ろしい海賊というイメージが強い一方で、このヴァイキング精神が後の南極点到達や、グリーンランド横断という冒険にもつながり、彼等の優れた造船技術とともに、多くの大海を越えた海運を興し文化の交流に貢献し、地域の財政を豊かにした植民者として高く評価されることにもなった。

また、近く七〇年代に入り北海で発見された石油は、当時の造船不況を救いこの国の産業に大きな活力を与え、現地で聞くところによれば、国家の経済運営も先々まで見通しが立っていて福祉や教育などの諸施策も安泰だという、まことに羨ましい国なのである。

一九九四年の国民投票ではヨーロッパ連合（EU）に加盟しないという選択をした。しかしNATOに加盟しており、様々な協力を通じて他の北欧諸国やEUと緊密な関係を保っている。

オスロ郊外のホルメンコッレンは一九五二年の冬季オリンピックの時ジャンプ競技に使われたスキー場で、ジャンプ台近くに犬を連れたスキー姿の男性像があるが、これは現国王の父君であるオーラフ五世だ。この親しみ深い姿を見て国王と国民の身近さを実感したような気がした。余談になるが、後日一九九八年に長野冬季オリンピックが開催され、日本選

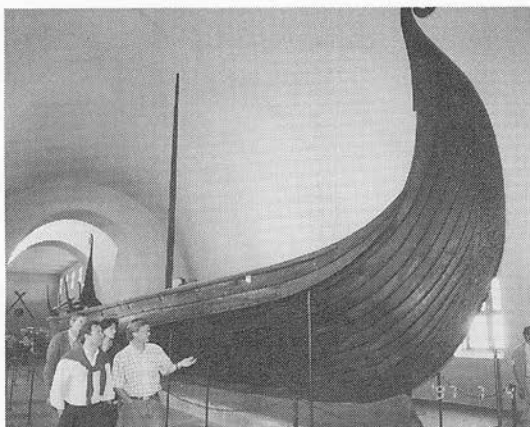
手も健闘したが、ノールウェイ勢の活躍も目覚ましかったことは記憶に新しい。テレビ観戦でひとときわ力が入ったのは、日本とノールウェイ選手の登場するシーンであったのも、私にとって今回の旅行で親近感が得られたことと無縁ではなさそうだ。

○

オスロにあるヴァイキング船博物館では復元された船体と、数々の遺品が陳列され往時のヴァイキング達の活躍や生活の一端がうかがえ興味深かった。

館内にある船はいずれもオスロ・フィヨルドで発見された三隻のヴァイキング船だが、船そのものは吃水線が低く竜骨により船体を安定させ、浅瀬から外洋航海までを可能にしたものとして彼等の技術力の高さが評価されている。博物館の資料に基づき、代表格のオーセベル船について触れておこう。オーセベル船は九世紀初期の建造で、五十年ほど使用された後、婦人の棺として埋蔵され船としての使命を終えている。船の規模は、船体全長二二メートル、中央部幅五メートルで、船体両側に一五対の櫓穴がある。このことから乗組員は三十三人と推定される。

この船は一九〇四年に、稀に見る貴重な幾つかの副葬品とともに発掘された。船は海から引き揚げられ濠の中に埋められ、船体の中央には屋根付きの遺体収納小屋が設けられて、



オーセベル船（ヴァイキング船博物館）

通なら腐ってなくなってしまう木材や、皮、織物類も信じられない程良好な保存状態だったということは驚異だ。また、オスロ大学の文献によれば発掘作業は困難を極め多大の時間を費したとある。例を挙げると、木材部分はおろくなっていたため、常時湿気の中に保存し萎縮やひび割れを防がねばならず、また、船体自体も損傷がひどく破片の塊といつてよく二千個以上の破片に壊れていたもので、これらの破片のすべてについて寸法を測定しそれぞれに番号をつけ、これらをもと

その中には二人の女性の遺体が安置されていた。多くの遺品は船内と小屋の中に収められ、船全体は粘土と芝生が覆いつくし、いわば一つの大きな塚を形成し、塚は缶詰状の密閉状態に近かったので一千年も経った後も、普

にして破片をつなぎ合わせるといった具合で、まるでジグソーパズルのような作業だったという。

船体以外の発掘品は、荷車、そり、靴、台所用品、箱類、寝台および織物等すべて目を奪うものばかりだった。多くの出土品には彫刻の装飾が施され、殆んどのが金属装飾品と同様に動物の姿が刻まれていた。オーセベル船の木彫は、金属製品のものとは比べ規模は大きく、芸術性においても注目すべきもので高い評価を得ている。ヴァイキング船の曲線美と出土品の随所に刻まれた華麗な装飾は大変印象的であったし、改めて北の男達のたくましさを感じずにはいられなかった。

○

一九九七年四月五日から六月八日まで世田谷美術館でムンク展が開催されたが、これは長野市がリレハンメル市から冬季オリンピックを受け継ぐ一九九八年二月まで催された「Visions of NORWAY ノールウェイ王国芸術祭 一九九七—一九九八 JAPAN」の一環として行われたものだった。

エドヴァルド・ムンクといえは誰でも「叫び」や「思春期」などの作品を思い出すに違いない。そして新しい版画技法を広めた芸術家として、また自らカメラを試み写真に魅せられた画家としても有名で、写真のぶれや二重露出、薬品のしみ

までがムンクにとつては重要で、彼の絵画にも少なからず影響を与えた。

本展はオスロ市立ムンク美術館のコレクションを中心に、オスロ国立美術館他の協力により、油彩、水彩、版画、素描などの絵画作品約一七〇点、写真約一一〇点が展示された。

オスロでは国立美術館と市立ムンク美術館を訪れて、「叫び」「思春期」「マドンナ」「病室での死」「病める子」などを鑑賞した。

「叫び」(一八九三) ムンクは若い頃母と姉に死別し、彼自身も死の不安の中で育ち、不幸にも今また妹を襲った狂気によりムンクの恐怖と不安の感情が高まり、その精神状態が極限に達していることが画面に描かれたゆらぎからわかる。

「病室での死」(一八九三) ムンクの姉ソフィーエの死の瞬間を描いたものだが、一家それぞれのたたまいから死に対する孤独と無力感が感じとれ、場面が肉親の死というもののだけに表情も硬く、冷たく淋しい雰囲気 of の漂う作品である。

「思春期」(一八九四—一八九五) 少女が裸でベッドに腰かけ正面を向き、両足を閉ざし両腕を前で交差させて、はじらいを感じさせる少女らしさをよく表現した作品だが、彼女のうしろには大きな無気味な影が漂い何となく見る人に不安を与える。

ムンク美術館にはムンクの遺志によりオスロ市に寄贈され

た彼の著書、手紙などをはじめ数々の作品が収蔵されその数は二万点ともいわれ、そのうちの約五〇〇点が常時展示され、一定期間毎に展示替えを行なっている。

私達が訪れた国立、市立両美術館とも内部は明るく写真撮影も自由で、名画とともに記念撮影なんてわが国ではちよつと考えられないことだ。また、長野オリンピックのお陰で、東京とオスロでムンク芸術に巡りあえたのも幸運だった。

○

ノールウェイの有名な彫刻家グスタヴ・ヴィーゲラン(一八六九—一九四三)は一八八八年、オスロに出て苦学の末奨学金を受け、ヨーロッパへ旅しその途次、オーギュスト・ロダンのスタジオを訪れ、ロダンからかなりの刺激を受け学ぶところが多かったという。

彼の人生は資金との戦いといってよく奨学金も底をつき生活を支えるため、五年間ほどトロンハイムの中世聖堂の修復作業に携わり、また多くの著名人のポートレートや記念像も制作した。

何といつても彫刻家として彼の最も重要な仕事はヴィーゲラン公園(一部はフロゲネル公園)の彫刻群である。一九二〇年、ヴィーゲランはオスロ市との間に、市はヴィーゲランに新しい広いスタジオを提供し、その見返りとして、ヴィーゲランは彼の保有するすべての美術作品と、これから制作す

る全彫刻のオリジナルモデルをオスロ市に寄贈するという合意書に署名した。

ヴィーゲランは一九二四年から一九四三年に死去するまでこの立派な建物で生活し仕事に熱中した。彼の死後一九四七年には、このスタジオはヴィーゲラン美術館として一般に公開され、彼の作品が展示されている。

彫刻公園といわれるフログネル公園には六〇〇以上の彫像から成る約二〇〇の彫刻群があり、これらはすべてヴィーゲランが原型をつくり、他人の手を殆んど借りていないといわれ、ヴィーゲランは人間の誕生から死までの葛藤をテーマとして喜怒哀楽のすべてを彫刻で表現した。注目すべき作品として、動物達を透かし彫りにした鉄製の正門、人間の一生を表現した五十八の青銅像で飾られた橋、人生そのものをテーマとした六人の男が水盆を支える噴水などがある。

中央にひときわ高くそびえるのがモノリッテンと呼ばれる高さ十七メートルの花崗岩の塔で、彫られた二一人の像が他人より上に昇ろうと苦闘している姿こそ作者の人生観の凝縮ともいべきか。この作品はヴィーゲラン一人で彫ったものではなく、彼が石膏のモデルをつくり、三人の石工が十四年の歳月をかけて完成したもので、実にスケールの大きな作品だ。

この公園の彫像は時代に関係なく汎世界的にするためすべ

てが裸像であり、その姿勢や表情などから自分自身の人生経験に照らし、自分に対応するものを見付け得るような気がして、そんなテーマの担い手としての役割を果たしているように思えるのである。

○

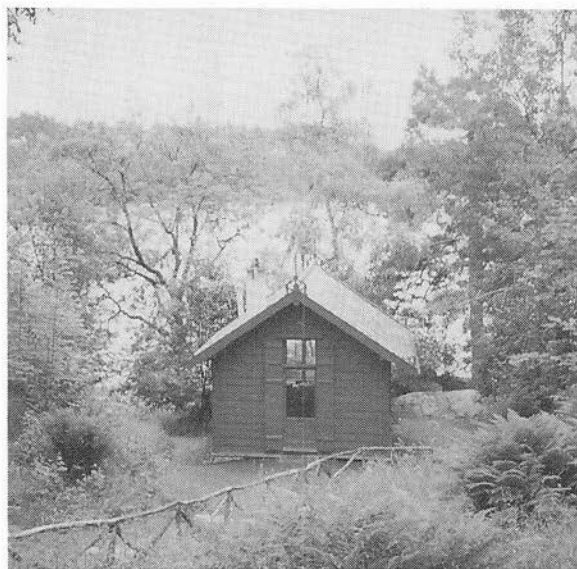
オスロを後にしてノールウェイ第二の都市ベルゲンに着いた。この町は十二―十三世紀はノールウェイの首都として、また十四―十五世紀はハンザ同盟諸都市との取引港として栄えた。しかし、十九―二十世紀には度々の大火で町の主要な建物が焼け、第二次大戦中にはナチスに占領された。ブリッケン一帯はユネスコ世界遺産に指定されている。

ベルゲン郊外にトロールハウゲン（グリーグの家）がある。ノールウェイの著名な作曲家エドヴァルド・グリーグ（一八四三―一九〇七）は組曲「ペール・ギュント」や「ピアノ・コンチェルト」をつくったことで知られ、彼の有名な音楽のいくつかは、この大自然の中の小さな家で生まれた。

彼は若い頃から一カ所に定着せず、ヨーロッパの音楽都市をあちこち旅したが当時としては大変時間のかかることだった。グリーグの名声と人気が高まるにつれ、ますます多忙を極め妻のニーナを伴って演奏旅行を続けた。彼女は素晴らしきソプラノの持ち主で良人の歌曲についてこの上ないよき表

現者でもあった。

エドヴァルド夫妻が家を持ったのは結婚後十八年も経ってからのことで、一八八五年、ベルゲン郊外の北にある湖畔に別荘を新築し移住した。邸はトロールハウゲンと呼ばれ、家の様式は当時流行のヴィクトリア風で内壁にはノールウェイの伝統的なむき出しの丸板が折衷使用されているが、この板壁は今でも民家でよく見かけるとのこと。



数々の名曲を生んだ作曲小屋（トロールハウゲン）

一八九二年、待望の小さな作業場である作曲のための小屋もできたが、そこでの仕事は必ずしも快適ではなかったようだ。はじめは断熱が悪く、雪や湖から吹きつける湿気のためリューマチに悩まされたが、多くの名曲がここでつくられたことは間違いない。

グリーゲはトロールハウゲンを後々も生活の根拠とするが、ノールウェイ西部の気候に次第に健康を蝕まれ、一時はオスロへの転居も考えたが、結局はベルゲンで一九〇七年に亡くなった。グリーゲの死後もニーナはここに住んでいたが、第一次世界大戦が起こりニーナの生地であるコペンハーゲンに移住し、資産は紆余曲折を経て地元の方に寄贈され一九二八年にはグリーゲの家・博物館が実現し公開された。

館内は元の台所を改装し「記念の間」として、グリーゲの想い出の品をこの部屋に集めて展示した。古びた旅行鞆、トロフィーをはじめ、外国での演奏の数々を示す資料や、自筆の楽譜、書簡など、特筆すべきものとしてはピアノ協奏曲で自ら指揮する際に用いた書き込みのある総譜も陳列されていた。

同じ階にある「食堂」と「居間」は夫妻晩年の生活を偲ぶに足るたゞすまいが残されていた。夫妻の人氣を物語る豪華な数々の贈り物、例えばスタインエイのグランドピアノ、ヴェーレンシヨルドの油彩画「遊ぶ子供たち」、デンマークの大き

な風景画、豪華なシャンデリアなどが飾られている。

最近になって高まるリサイタルの要望にこたえ、また音楽家が親しく発表会を催す場として、敷地内に座席数二〇〇ばかりのトロールサーレン（トロールの広間）が設けられた。

○

ノールウェイの海岸線は複雑に入り組み、この部分が氷河時代に氷河の圧力により削りとられた谷間で、フィヨルドと呼ばれていて、ベルゲンはフィヨルドの玄関口でもある。

最も一般的なフィヨルド巡りのコースとして私達は七月はじめ、ベルゲンのホテルを朝九時頃出発して、鉄道でソグネフィヨルドの上流をめざした。偶然にも私達の泊ったホテルは六月下旬に、北欧首脳会議に出席するため当地を訪れたばかりの橋本前首相の泊ったホテルと同じだった。

列車がベルゲン中央駅を一〇時二〇分に出発して直ぐ車内では特注の大きな重ね弁当がでた。一等席は綺麗でゆとりもあり、ゆっくりくつろぐことができ快適な旅が期待できそう。この日、唯一の心配は天候だった。曇り空で雨が降ることも予想され海上は寒いかも知れないと気を遣う。フィヨルドの天候は予想が難しいと聞いていたからなおさらだ。

やがて、列車は長さ五三〇〇メートルのグラウヴァルス・トンネルを抜けて標高七五〇メートルのミルダールに到着。ここでオスロ方面の列車と合流する。暫らく待合させた後フ

ロム鉄道に乗り換え終点フロムに向かう。この線は長さ二〇キロメートルと短い、深く刻まれたフロム峡谷を走り、岩山をらせん状にくり抜いたトンネルを通過しながら五〇分くだる鉄道技術の粋を集めたノールウェイ国鉄の誇る世界でも有数の山岳鉄道だ。この五〇分の間、パノラマ景観が次々と車窓に映り、しぶきをあげる雄大な滝、雪をいたく山々、谷底の緑などカメラを構えてシャッターをきるのに太忙しだ。沿線に展開する光景を眺めたり、カメラに収めるには座席に座っている暇はない。いつでも左右の窓際に移りシャッターチャンスのねらえる状態にしたいが、はじめての経験では、いつ、どこに、どんな景色が現われるか見通すのは至難の業だ。ただ、こういうことを予想してのはからいか、列車を停車させて撮影する時間を与えてくれるサービスも忘れていない。ミルダールを出発して間もなく列車が止まり眼前にショースフォッスンという物凄い轟音とともに水量豊かな滝が現われてそのすさまじさに圧倒された。停車中は列車から降りて自由に撮影できる。

終点のフロムは約二〇〇キロメートルにも及ぶ最長のソグネフィヨルドの奥のアウールランフィヨルドにある小村で、ここから乗船して海上をグドヴァンゲンまで約二時間の船旅を楽しむ。気掛りだった天候もどうやら雨の気配はないが、昨夜来降ったらしい雨が次第に回復しているようで、船の行

く手に現われる山々にかかる霧や海面から立ち上る水蒸氣の中を行き交う船の姿も見え隠れしてとても幻想的だ。

船は切りたった山を廻り、ある小さな村落へと近づく。不思議に思いその方向を注視すると、岸壁に四、五人の人が立っている。そこで一旦停船して運んで来た荷物をおろし、待っていた人々を乗せた。どうやらこの船は観光船と同時に定期便として乗客や荷物の輸送も担っているようだ。このように数カ所の寄港地にたち寄りながら進む。空も次第に開けて青空が覗き、断崖や遠くの雪をいただく山々や、山から落下する数本の滝の姿も美しい。餌を求めて追って来る水鳥の姿や海の色も山裾のサファイヤ・ブルーの神秘的であつたり、スクリューにかきたてられ鮮やかにきらめくシルバー・ホワイトの躍動的であつたり、様々な様相や色合いを呈し、フィヨルドならではの光景が現出する。船の進行に伴い、海の幅も広く、あるいは狭く刻々と変化しながら両側には高い山々が迫ってくる。高い山では一八〇メートルもあり迫力がある。フロムとグドヴァンゲン間には世界で最も幅が狭く、最短二五〇メートル、長さ一一キロメートルのネーロイフィヨルドがある。

この船旅の終点はグドヴァンゲンで、ここからはバスで急なカーブの多い昔の日光の「いろは坂」を思わせるような山道を登りスタルハイムに着く。

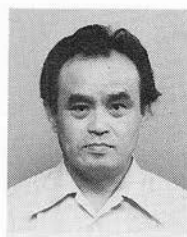
ホテルの資料によると、一六四七―一九〇七年の間、王立伝令便のいわゆる早馬がコペンハーゲン・クリスチャンセン（オスロ）―ベルゲンを走っていた当時、このスタルハイムの峠で一服して馬を替えて行くのが伝令達の習わしだったという。やがてこうした目的を満たすため宿が設けられた。因にスタルハイムとは馬舎の宿という意味だそうだ。一〇〇年程前から人々の往来がはげしくなり一八八五年、ここに最初のホテルが建ち、これをきっかけにヨーロッパ諸侯の好む保養地として利用され、なかでもドイツのウイリヘルム皇帝は二十五年もの長い間、毎夏続けて訪れたという。高松宮殿下も戦前このホテルに滞在された。現在のホテルは四回目のもので一九六〇年の建築だ。スタルハイムホテルの庭からの眺望は素晴らしく、フィヨルドは峻嶒で神秘的でさえる。

ホテルで少憩の後、ヴォスを経て夕闇迫る頃ベルゲンに戻り、一日たっぷり楽しんだフィヨルドの旅も無事終った。物好きな仲間たちと、旅の疲れも何のその、橋本前首相が首脳会談や会食に利用したというベルゲンの小高いところにあるレストランに落着いた。美しい港町の夜景の楽しめるレストランだった。

（二九九七）

Charity と希望 —私の旅立ち

松 本 榮 二（春日町）



三十五年勤めていた大学が、昨年夏休みに入る直前の七月にリストラを発表した。大変な赤字を抱えていることが分かった。六十五歳定年の断行と七十歳までの特遇制が廃止と

相成った。私は六十七歳だから、やむをえない。今春、上智大学を退職した。

若い頃から、私は、いつかは社会福祉の施設で働きたいという想いがあった。この二十年近く、私は、十代で妊娠した未婚女性を支えるボランティア活動をしてきた。その仲間ら四人で、二十一世紀には、社会が必要とする痴呆性老人向けのグループホームづくりを考え始めていた。幸せなことは連続してあることだ。信州に一、五〇〇坪ばかりの土地を買い取ることができた。ボランティア仲間四人でお金を出し合ってきた一億円近くで四軒の建物をこの四月に完成。個人棟三戸、夫婦棟一戸それに共同棟一戸。そこに五人の高齢者を迎え、必要な個別生活の場を提供する。そのことで痴呆の進行を少

しでも遅らせることに挑戦する。六十代の者として、一つの仕事を終えた「今」、敗戦後の日本を支え、われわれを育み、今日ある生活の基盤を作ってくれた我々の先輩に対する「勤め」と考え、この仕事に手を付けた。

私は退職金をつぎ込んだ。妻は「貴方がしたいことでしょ」と、僅かばかりあった貯えから、足らない分を出してくれた。私達夫婦は幸いなことに今まで一度も病氣もせずに来れた。これからも健康でさえあれば、儉しい生活は年金で何とかできると決め込み、第二の人生を歩み始めた新人というところだ。

給与生活しか知らない私にとって、グループホームを運営することの大変さを味わう毎日が始まる。国や地方自治体は単独型のグループホームを社会福祉法人として認可せず、補助の対象にしていなことが分かった。病院や特別養護老人ホームに併設されるか、若しくは、それらと混合したグループホームのみが国や地方自治体の保護の対象になっていた。ここにも日本という国が考える政治や行政の一断面を見る。

グループホームとは従来の施設中心の社会福祉からの脱皮を目指すものとして、生活地域に基盤を持つ、いわゆる、地域福祉を目指す新しいタイプの福祉活動として登場してきたものである。仲間の四人が苦勞して手に入れた過疎の山農村には病院や福祉施設等ない。しかも、高齢率は二五%、まだ

に少子高齢化社会である。ここには、日本社会が全体として、間もなく、直面するであろう社会の縮図が、その断面を見ることが出来る。このような地域にこそグループホームが必要なのである。

私達仲間は国や自治体が認めない福祉活動として、単独型の「高齢者のためのグループホーム」を、この過疎の山農村に造ること、一つのミッションとして始めることを話し合った。それは私達仲間にとってでもある。Charityとしてグループホームを開設し、運営することは私達仲間にとって本当にできることなのであるうか、と不安の思いにかられる。周りからは、ドンキホーテだとか、自分の能力を知れとの声もかった。

村の長老と話し合った結果、グループホームを利用する高齢者からはその利用料として、月に七五、〇〇〇円をいただくことを決めた。私たちは、提示されたこの金額にはさすがに驚いた。五人の痴呆性老人に必要な介護サービスを提供するために、私たちは七人のスタッフを整えなければならないと判断した。高齢者にとって食事は何よりも待たれることであらうし、また、楽しい時でなければならぬ。そのための必要経費も大変である。それら全てをこの金額で賄えとは何と酷なことであろうと思った。

しかし、私達のこうした考えがいかに浮わつたものであつ

たかに気づくことになる。過疎の山農村で生活する人々にとって、また、グループホームの利用を必要とする高齢者家族の人々にとっては、七五、〇〇〇円の自己負担がどれほど重いものであることかを知ることになる。私たちの忘れていた、貧困が過疎の山農村には今なお顕在してあることに直面することになる。そのため、国や地方自治体との交渉の場には、何時も、貧困が様々な局面に姿を現わし問題を複雑化させていることに気づく。

私たちは行政との交渉を根気よく続け、話し合う場だけは失うことがないようにと苦慮する。村役場の担当者に言わせると、私達が始めた仕事など、「国が社会福祉法人に委託するべきものだ」という。保険や市場原理などを社会福祉の世界に持ち込み、それで福祉ができるなど、「夢のまた夢だ」と呟く。介護保険が間もなく始まるというこの国のことを外国の出来事のように受け止めているのではなからうか、とさえ疑いたくなる言葉にしばしば出会い、戸惑い、立ちすくむことがある。私達の仕事が社会福祉法人のものであれば、何とかなるものと有情のある所を顯わに示す。しかし、国は単独型の痴呆性老人向けグループホームの法人認可を認めない。理由はその前例がないからということだけである。私達がグループホームの実績を作り、活動のデータを積み上げ、単独型のグループホームこそが日本の各地には必要なこと、

まず、社会福祉法人の認可をするよう国に訴え続けることが必要なのだということが分かった。

村に往来するようになって五年。村の人たちは、私たちによく声をかけてくれるようになった。自分の家にできたものだといって、いろいろな野菜や果物を持たせてくれる。また、子供たちの遊びの場として、グループホームが利用されるようになりつつある。私達にとってもうれしいことだ。私たちはグループホームの場が、単に高齢者の憩いの場となるにとどまらず、この「場」を媒介にして村の人々と、年齢や階層をこえて、一緒に、近い将来、確実にやってくる超高齢社会を逞しく生き抜く知恵を出し合い、具体的に対処していく方法を開発していく役割を担うものでありたいと考えている。

しかし、現実には、まだ、私達のグループホームのことを「金持ちの別荘じゃ」と告げられ、啞然とするかもしれない。ある。私達の夢は、私達のグループホームを必要とする人には、誰でも、いつでも、利用していただくことが可能となることだ。そのためにも、この小さな活動を成功させること。

そして、グループホームを必要とする地域に次々と作っていくことだ。志のあるところ、全国いずれの農山村でも簡単にグループホームを作ることのできる社会造りをめざす仲間の環を持つことだ。そのための研修・学習の場として、またその情報を提供していくことのできる能力を私たちの場が整え

ることができるよう計画している。

この願いは幻で終わらせるわけにはいかない。すでに韓国の教え子たちが助けの手 *Helping Hands* の提供を申し出てくれているのだ。来春二月からカトリックの修道女二名がボランティアとして来日する。四年の契約で助けるというのである。問題がないわけではない。ビザの取得だ。私達は希望をもって「援助の手」を待つ。希望こそ私の人生を今日まで支えてくれた源でもあるからだ。苦しいとき、閉塞状況にあるときこそ、希望が必要なのである。私は、与えられた第二の人生を、この希望によって「生きる」エネルギーの源であることを再確認し旅立つところである。

私と丹波焼

義 積 保（春日町）



今から二十数年前のこと、義父から室町時代から江戸時代にかけての古丹波の壺や徳利を数点貰った。そんなこともあって、私は焼物、とりわけ丹波焼に非常に興味を持ってお

り、家内とデパートへ買物に行っても時間と場所を決めて分かれ、自分は焼物売場か美術品売場で時を過ごすのが常である。昔、大阪支店に勤務していた頃は、社宅も西宮にあり丹波は身近なものであった。昭和四十六年東京本社勤務に戻ってからは、東京地区のデパートや展覧会で丹波焼を目にする機会は、残念ながらあまりない。

丹波焼は備前、信楽、越前、常滑、瀬戸と並ぶ六古窯の一つである。有名な有田や萩、関東では益子等々は、秀吉の朝鮮出兵以降栄えてきた窯場である。平安時代の終わりに何故か丹波、常滑、越前などに、同じ様式の壺が作られているという。八百数十年前には中央政府や社寺のものとめに応じて祭品、経壺、薬壺など上手物が焼かれているが、それも陶土や窯の条件からその目的に応えることが出来ず、丹波窯はいつしか庶民の生活用品を焼く道を辿った。しかし丹波の陶工達は庶民の使う器の中に、穴窯時代の焼締めのに流れた自然釉（とりわけ松の緑が美しい）登窯時代前期の灰釉や赤土部釉、後期の白釉を中心とした時代と新しい技を築いてきている。昭和に入って柳宗悦氏が民芸運動の中で丹波焼を、最も日本らしき品として激賞してから、丹波も改めて見直された。昭和三十年代以降の高度成長によって、日本人の生活も豊かとなり、あちこちの窯場は賑わいを見せ、丹波立杭も例外で

はないらしい。

つい先日、丹波焼の気鋭の作家、西端正さんの個展が日本橋・三越で催され、久しぶりにご夫妻にお目にかかった。氏はこのところ二年に一回は三越本店で個展を開かれるようになり今年で三回目であるが、ひよんな事から昨今親しくお付き合ひさせていただいている。今から十四、五年前のことであるが、家内のお供で柏のそごうに行き、例によって焼物売場をぶらぶらしていると、丹波の文字が目につき、よくよく見ると西端正氏なる作家の絵皿が陳列してあった。当時西端なる人を知る由もないが、こちらで丹波を目にするのが珍しいのと、丹波とは思えない色合い、紋様にひかれてその絵皿を買った。確か五万円であった。

以来その絵皿は我が家の玄関に飾ってあるが、それから四、五年たつてある日の新聞に、日本伝統工芸展の大きな広告があり、その中に「総裁賞・西端正」とあるではないか。ウムツ、どこかで聞いた名前と思うが突然には思い出せない。あの絵皿の箱書を見ると、正しくその西端氏であった。それから二、三年経過して、NHKが主催する「日本の陶芸―今百人展」がパリと東京で開催され、氏は著名な陶芸家に交じって選ばれていた。その時の作品掛分八角蓋物「丹波陶篋」は私が三越より買い取らせて貰った。その後丹波に帰省した時、今田

町立杭の窯場に西端さんを訪ねたりしてご縁ができた次第で、氏が上京された時もお目にかかることにしている。先日、個展も、氏の力強い器形と木灰釉と高灰釉との掛け分けによる「窯変丹波」がなかなかの人気であった。

毎年秋に開催される日本伝統工芸展を私は毎年見ているが、この頃は西端さんに刺激されてか、多数の丹波の若手作家が応募し入選していることは大変頼もしく思っている。たまに丹波に帰ると、窯場を訪ねたり丹波古陶館や故西山代議士が建設に尽力された丹波伝統工芸公園「陶の郷」あるいは散在する骨董屋さんを散策するのはとても楽しんだ。もうしばらくして会社生活を完全リタイアしたら、陶芸教室にでも通おうかと思ったりするこの頃である。

小網代の森に魅せられて

— 自然保護活動ボランティアメモから —

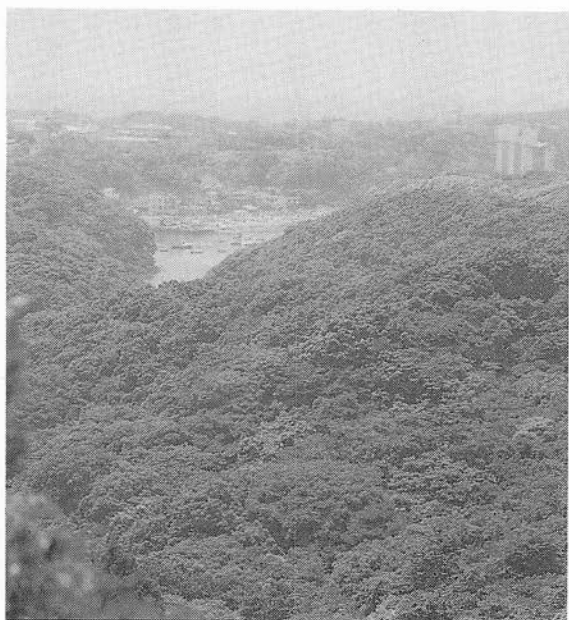
山 本 紀 子 (山南町)

ゴルフ場が日本列島のあちらでもこちらでも、まるで大雨のあとに水たまりができるように、ばこばこ生まれていっ

た頃のことである。神奈川県三浦半島の先端に通称小網代の森と呼ばれている約百ヘクタールの小さな森があり、この森も御多分に漏れず、ゴルフ場と一部住宅にと計画が打ち出された（八五年作成、筆頭地主の電鉄会社の三浦開発基本構想）。ここは鉄道延長計画に鑑み、以前（七十年）に第一種住宅地域に地目変更されていて、勿論宅地としての納税がなされている曰くつきの森である。地元の経済的發展を優先してのゴルフ場建設計画であり、三浦市議会でもその案が決議されていて、実現の日を夢見ていた状態。その頃自然保護に関心の高かった著名人たちが、開発は絶対止めるべきであると、県に申し出たが取り上げられなかった。

この森はコナラ・ミズキ・ヤマハゼなどの落葉広葉樹を主体とし、モチノキ・シロダモ・マテバシイ・タブなどの照葉樹の散在する混合林である。最奥部には大木の茂る鬱蒼とした林もあるが、その大半は数十年前まで薪炭林であった。複雑に入り組んだ谷底の部分は、以前、谷戸田が開かれており、土地の人々の暮らしを支えていた。石垣などから暮らしの跡も伺える。今この森は、人々からようやく解放され、生きものたちの賑わい暮らし三浦の原風景に復帰しようとする途上にある。

ここには、一本の川が源流から下流までを貫き、湾に注いでいる（数本の支流あり）。これを集水域というが、それが



三浦半島先端に広がる小網代の森

分断されずまるごとそっくり残っているのは、大変貴重である。当然生態系の多様化がみられる。カニを例にとってみると、上流部の流れの石の下にはサワガニやモクズガニが潜み、流れに沿った斜面にはアカテガニ・ベンケイガニ・クロベンケイガニ、そして大型のハマガニが暮らす。河口部のアシ原にはアシハラガニなど干潟にはケフサイソガニ・イソガニ・ヤマトオサガニ・マメコブシガニ、さらにちごガニやコメツ

キガニが分布し、その先の水面下にはガザミやイシガニたちも暮らしている。三十種以上のカニのすみわけが典型的な形で観察される水系は、首都圏ではもう他に例がないはずである。上流域にまず春かんざしのようなキブシが咲き、木々の新芽が日毎に伸び、足元にはフデリンドウや各種スミレが可憐な花をつける。中流域の初夏のコナラの銀緑色の若葉をバックに無数の紫のフジの花房が圧巻である。カラスアゲハやジャコウアゲハもゆうゆうと飛来、モンキアゲハやアオスジアゲハなどは夏下流でよく見かけ、夏の夜ゲンジボタルとヘイケボタルも光の欲待を惜しまない。ある局の撮影に付き合ったとき、コゲラが嘴で、コナラの木をつつきながら螺旋上に上っていくドラミングを目撃しカメラもキャッチしたのだが後からビデオを見て「あの森での感動には到底及ばず、残念だ」とじかに接することの幸せを悟ったりもした。

夏の大潮の夕方、森からぞろぞろとアカテガニが海に下りてきて、日没を待って全身を懸命に震わせ放卵する。海に入り静かに観察するのがとてもいじらしく、いとおしく感じしてしまう。その無数の卵は、直ぐゾエアとなり、数週間海で生き、山(森)に生活の場を移す。川の水に守られての脱皮を繰り返す。カワセミの美しい姿に触れたこともしばしば。ほかにも限がないほど、大自然の感動のドラマに魅せられてきた。緑風になびかれるだけでも豊かな気分になれるという

のに。

私が生物に興味を抱いたのは、上久下中学校（山南町）在学中、近くの山での実習時のことである。たまたま校長でもあり、生物学者でもあった細見末男先生の隣で下草刈りの作業をしていると、「これはコナラの木で、この絡まっている蔓がクズと言うんですよ」と、にこにこしながらも熱っぽく生き物の魅力を説いて下さった。植物を「草」や「木」としか認識していなかった当時、強い衝撃を受けたものである。

その後、当市に住んで八年たった頃、誘われて森に入るようになり、ゴルフ場建設予定地であることを知り驚いた。しかし、運動に加わることは避けたいと思いつつ、「自然は、子や孫から預っている大切な宝物である」とか、「今は住民の方から要請しないと行政側は勝手に動けない時代だ」とも言われ渋々係わりはじめた。主たる活動拠点は「小網代の森を守る会」（九〇年結成）で、全員純然たるボランティアスタッフとしてである。会員数は四〇〇。スタッフは、数名であったのが、現在若手、大ベテランも加わり二〇名に、心強い限りである。県への再三の要望書提出も「生態系の重要性を強調しても、直接的な対決はせずヴィジョン、代替案を提示する」という方式であった。県知事宛ての反対署名（八九年）三万七千は、市の人口が五万少々からみて堂々の数であった。県主催の第四回国際生態学会（九〇年）参加者のうち二

〇ヶ国九十人が小網代の森を観て「ゴルフ場計画に絶句」。「これは地球の宝である」などと熱く心強いコメントを寄せてくれた。

先進国では、近代産業の発展の代償として、失った自然が如何に貴重だったか、その復元がどんなに難しいかを実感しているようである。トラスト運動も約百年前イギリスで、産業革命で荒廃した自然環境、歴史環境を取り戻そうと市民三名で始めた運動であると言われている。自分も含め日本人がごく短いサイクルでしか未来を見られなくなってしまう現代、末代にまで目を向けた先輩たちに敬意を表したい。

日本でもこのイギリスのナショナル・トラスト運動のことを朝日新聞の「天声人語」欄で紹介した記事を、知床の斜里町町長が見て、当時離農者が残した土地を保全する手立てとして役立てた。後の「知床百平方メートル運動」に広がり最終的に五万人近くの協力が得られたとか。運動団体の交流の場では、出向くたびに励まされ元気づいたものである。事例はあげきれないが、いずれもその背景に汗と涙と感動の渦が巻いている。日本のナショナル・トラスト運動の第一号である鎌倉の歴史的環境を守る市民運動について、主唱者の一人であった作家の大佛次郎氏が述べた「この運動は過去に対する郷愁や未練によるものではなく、将来の日本人の美意識と品位のためである」のひとは忘れられない。

この森についても、新聞各紙挙げて支援記事の掲載を惜しまず、テレビ局毎の工夫を凝らした番組が認識を高めてくれた。定期的な観察会とゴミ拾い、森案内や広報活動等で、一層の支援が得られ、感謝すべきは、九五年に『小網代の森を県が七五ヘクタール 保全』と表明、地元三浦市でも引き続き『保全』の意思を公にしてくれたことである。完全な形で『自然公園』等として保全されるのはかなり先のようだ。『小網代野外活動調整会議』は、森を利用する団体や学校からなる組織で生態系の維持と安全の啓蒙活動やバトロールを行い、理想的な保全の促進に寄与していくのだろう。

自然の偉大さとやさしさを再認識でき幸いと思う。

〈参考文献〉「いのち集まれ小網代」岸 由二著・木魂社発行

「三浦半島・小網代を歩く」夏の自然観察ガイド 小網代の森を守る会・若手スタッフ編

俳句と母

足立和巳（青垣町）

今年は亡父の十三回忌法要のため、例年の盆帰省より一週間ばかり早く、既に数年間住む主^{あはれ}を失った故里の茅屋に帰り、

八月九日に九十二歳の母ほか親戚に集まって頂き、賑やかに法要を終え、八月十一日より十三日までの三日間を、母の面倒を見てくれている神戸の末弟の所に寄りました。

そこで、三十年以上俳句を続けている母より「平成十年宮中御題『道 朗詠句歌集』のカセットテープ一本と、宮中歌会召人一名、選者五名の方の和歌各一首と、全国からの応募句約四五〇句の中から選ばれた十九句の句が書かれた句詞カード一枚を貰いました。母の献上句は十二番にありました。

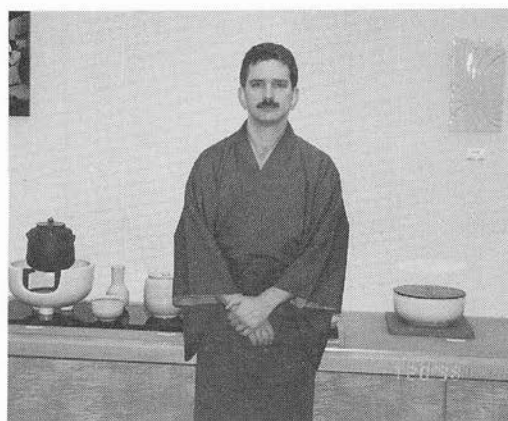
光陰の早さを告げる落葉道 足立つゆの 作

宮中の課題による歌会初めは極く一般的に知られています。文芸出版社が毎年歌会初めと同じ題の句を募集して、その中の約二十句をテープに起こし、宮内庁を通じて献呈されていることを、この度母の句が選ばれて、そのテープを買って初めて知りました。文芸出版社に、和歌人口より俳句人口のほうが遥かに多いのに、歌会初めがあつて、句会初めが宮中で何故ないのか伺いましたところ、和歌は万葉の時代からあつての歴史的な宮中の「しきたり」となっているとのことでした。しかし、正岡子規や高山樗牛の頃に、句会初めの運動が一度起こされたことがあるそうですが、お二人が死去され、実現しないまま今日に及んでいるそうです。

ピーター・ハーモンさんとの 出会い

常岡 幹彦（柏原町）

先日、三越本店でのこと、和服姿のピーター・ハーモンさんが私の個展会場に入ってこられた。ちょうど同じ会期で作陶店を開かれていると店の人に知らされた。



翌朝、早速ピーターさんの会場に伺うと、今、和服に着替える最中だという。その間、青磁の水指、鉢、花器、香炉など一点一点ゆっくり見ていくうちに、青磁独特の形（線）の中にやわらかなぬくもりを感じて、今回新しく挑戦されたという辰砂に青磁の釉薬を埋

め込んだ「掛け分け辰砂」の菓子鉢を一点わけていただいた。そうこうするうちに、ピーターさんが来られて何となく雑談となり、「どちらにお住まいですか」と伺うと「私、丹波です」と流暢な日本語が返ってきた。「私も丹波の柏原の出です」「オー私、柏原によくお寿司を食べに行きます」——これにはビックリ。丹波にゆかりのある二人が同じ会期で個展を開いていたという不思議なご縁であった。話をしながら何気なく、会場のお作を見ていると、そこらにじみ出てくるものはやはりこれはピーターさんのお人柄なのだと気づく。今もこの菓子鉢を眺めながら原稿を書いているが、程よい辰砂の色に埋め込まれたわずかな青磁がよくなじんで、品格のある美しさに心がなごむ。

ピーターさんはアメリカの方だが、日本にはもう十五年ほど住まわれて奥さんは日本人でお嬢さんがおられるとか。また美術部の方から茶の道にも堪能と伺った。

ピーターさん（巖）は一九五六年、アメリカ・ネブラスカ州の生まれ、八四年に第39回新匠工芸公募展初入選以来、朝日陶芸展、中日国際陶芸展、日本伝統工芸展等入選、伝統工芸近畿展日本経済新聞社賞、新匠工芸展新人賞、「花の陶展」（嵯峨御流）奨励賞、九六年新匠工芸会会友、日本橋三越本店で個展、現在日本工芸会正会員。多紀郡丹南町味間奥にお住まい。

臨終の母の一言

宮野 近（柏原町）

一九九八年三月末日「丹波のおはなはん」は昇天した。私の母のことである。明治・大正・昭和及び平成の四世代を懸命に生き抜き、かつ走り抜いた「丹波の女」である。

虫の知らせとも言うのであろうか、私は一週間前から帰省し、日赤柏原病院にて、看護の真似ごとをしていた。血色も良いし、意識もはっきりしているので、一時帰京しようかと思ひ、実家に荷物を取りに帰ったときである。突然、電話にて「呼吸停止」を知らされた。

まるで、キツネにつままれた気持ちであつた。僅かに十五分前まで元気であつたからである。慌てて日赤へ駆けつけたが、時すでに遅かつた。人の一生のはかなさをしみじみ思い知らされた。

昇天前日、母は私に向かって、こう言つた。

「あなたにだけ良いことを言つてあげるから耳を貸しなさい……」と。言われて、私は宝の隠し場所でも教えて貰えるものとはかり思ひ、喜々として母の口許に耳を近づけた。

すると、意外にも母の口からは「悔い改めなさい」の一言

であつた。その音声は、とても病人とは思えない程の力強さがあつた。まさか、そんな言葉を吐くとは思わなかつたので、飛び上がらんばかりの驚きであつた。次の瞬間、当方、がっくりとうなだれ、しばし茫然。

しかしながら、冷静に考えてみると、その言葉は私に対する警鐘であらう。「宝を天に積もうとせず、ひたすら地中に隠しながら生き伸びようとしている者」への警告と思えるのである。謙虚に反省する必要性を感じた。

人生は戦いの連続である。なるべく多くの趣味を生かしながら、それを乗り越えて行きたい。しかし、最終的には家庭の平和が一番大切である。そこに思ひを致し、日に三省しつつ、一日一日を大切にし、残された僅かの人生を有意義に過ごしていきたいとして、願う次第である。

信州に住んで

松井 千恵子（旧姓長田・柏原町）

『山ざる』誌が届くと、懐かしい名前を見つけたりして、嬉しく読ませて戴いております。

長野市に住んで三十数年、すっかり信州人になっているか

と言え、案外なり切れなくて、そのくせ丹波人でもなくて、根っこのない雑草のようなものかなあと思ったりします。方言も最初の頃は殆んどわからず、「いかず」と言われて、行かないのかなあと思っていると、「行こう」ということだったり、「われ、おれで育った仲だ」と言われて、どちらも自分のことなのにと思っていたら、「われ」というのは「君」、つまり相手のことだとわかりました。「草が、ほうけて困るわ」と言われると、草がほけると、どうなるのかなあと思ひ、聞いてみますと、草が大きくほうほう伸びて茂るということだったのです。

子供を連れている時には、「このほこ、わにないねえ」と言われ、女の子なのに、男の子に間違えられたのかなあと思ひ、わにるとはなんだろうと思ひましたら「この赤ちゃん（男も女も）人見知りしないね」という意味だったのです。

「ずく」という言葉も、よく使われます。「ずくがない」「ずくが抜ける」「ずくなし」、いろいろな使われ方がありますが、根気、やる気、気力、努力等々、あらゆる時に使えて、とても便利なのです。今では、大体の言葉は、わかるつもりですが、使うことは殆んどできません。今の若い人達は、あまり方言を使いませんし、自分では、最近丹波の関西弁を使っているとも思わないのですが、やはりイントネーションが違うらしくて、長野の人じゃないですね、と言われてしま

います。やはり気持ちは丹波人なのでしょう。先日、ラジオで「兵庫県柏原町の方からの投書を読みます」と聞いただけで嬉しくなりましたし、めったにないことです。新聞に兵庫県氷上郡と載っているだけで、旧知の人に会ったような気が致します。

また信州と丹波の違いと言え、空気が乾燥しているせいの、よくお茶を飲むことでしょうか。一杯や二杯ではなくて、何杯も注ぎ足して飲みます。どんどん注ぎ足さないとい「お茶もふさふさもらえない」と言われてしまうのです。またこの頃は、殆んど見かけなくなりましたが、十一月になると、どこの家でも、庭先に大きな桶を出して、大勢で野沢菜を洗い、漬け込んでいました。沢庵と野沢菜が、冬のお茶受けになります。会社や工場でも、漬け物を漬けておりました。野沢菜は、葉の部分は殆んど切り落とし、茎を主に食べます。漬ける時に洗いますから、桶から取り出した時は、そのまま切って食べます。長野へ来た当初は、そんなことも知らず、沢庵のように洗って食卓に出し、叱られたこともあり、今年長野では、冬期オリンピックが行われましたので、高速道路が開通し、新幹線が走るようになって、やっと東京は近くなりましたが、今でも名古屋までは、特急で三時間かかります。今でさえこの時間ですから、三十年前は、急行で五時間かかりました。福知山線にも特急が走り、随分早く帰省

できるようになりました。昔は長野から夜行で大阪へ着き、鈍行の福知山線に乗り換えていましたので、子供が小さい頃は、すっかり飽きてしまつて、各駅に停まる度に、他の乗客に付いて降りようとして、困ったこともありました。

まだこれからもこの信州で暮らしていけば、また違った面も見えてきて、私の考え方も変わっていくのかも知れませんが、「柏原」という言葉を聞いて、嬉しく、懐かしい気持ちになることは、終生変わらないと思います。

ゴルフ思考あれこれ

細見次郎（氷上町）



今年の桜時、ホームコース七番のティーショットで開眼した。ボールを見なくても打てる感覚を悟った。

アドレスでボールの位置を確かめてからはボールを見ないようにした。バックスイングからトップに行くあいだ、ボールのうしろの芝を見つめて、その場所へクラブヘッドの底面（ソール）を上から叩くように振り下ろした。ボールを打とうという気持ち

ちは全くなく、広いソールを振り下ろすことだけを心がけた。手に心地よい打球感を残して、ボールは青空に高く舞い上がった。ボールが飛んだのはスイング中の一つのアクシデントでしかなかった。僕はトップのとき、はたしてボールは当たるだろうか、フェースはまっすぐに降りて来るだろうか、いつも不安を覚えた。あのときはボールのことも、フェースのことも考えず、ひたすらソールで芝を叩くことだけを考えてクラブを振った。これまで感じた、トップでの不安や緊張はなかった。

はたして名手はスイングしているあいだボールを見ているのだろうか。アマゴルフの雄、中部銀次郎氏は「逆転のゴルフ」で「わたしはボールを見ていない、アドレスでは確かに見ている、がスイングがはじまると、もう目はボールから離れている」と述べている。どうもプロ級のゴルフアはボールを見なくても打てるという感覚でゴルフをしているようだ。トーナメントも後半になるともう無意識でボールを打っているという。

この開眼のあと、「まず、初めにスイングありき」を意識するようにしている。しかし、いざボールの前に立つと、ボールを叩くことの方が大事に思えてきて、スイングすることを忘れる。これは永遠のテーマである。

右足の膝はバックスイングの途中で伸ばさないように気を

つけている。調子にのってこのことを忘れると、たいがいミスを犯している。スエイしているかもしれない。右足の膝を止めようとすると、窮屈になるので、膝の角度を変えないようにしている。ただそれだけで下半身の安定が維持できると思う。

ゴルフで最も難しいことは、体は水平回転させながら、同時進行で手は上下運動させることである。これは極めて不自然な動きである。このことは常に意識していないとできない。これを知らないで、野球やテニスのように手は体の回転について前に出てしまう。このほうが人間にとって自然な動きであるからである。コースに出るときは、「手はアドレスで構えたところまで戻せ」というメモをポケットに入れて行く。僕はこんな基本的な部分も知らないでゴルフをやっているのである。

スイングはゆっくりやる。このことは分かっているけれども、なかなか出来ない。急いで打つ癖がついてしまつて、なかなか直らない。トップで止めて、一呼吸おいてからダウンスイングに入るぐらいが良い。トップのとき、ボールを凝視して、フェースで当てよう、合わせようと思えるから、不安な気持ちになる。この恐怖から、早く逃避したいがため、トップの間がとれないのである。ボールのうしろで、クラブを振ることだけを考えていれば、トップの不安は消えるだろう。

ゴルフは気持の持ちようで、易しくもでき、難しくもできるようなものである。これまで僕は勝手に難しくしていたようである。最近、BSテレビでアメリカのゴルフ中継をやってくれる。有り難いことである。アメリカのプロはスタンスしてからボールと方向を何度も見直してから打って行く。これはなにか重要なことのように思われる。今、そのことを考えている。

ゴルフのことをあれこれ考えたり、開眼したと、悟ったと喜んでるのはまるで童子のようである。ちよつとしたヒントが浮かぶと、外に出てクラブを振る。振っているときは他のことは忘れて、夢中になれる。ゴルフのことを考えたり、ゴルフをしているあいだの精神の解放がどれだけ健康に役だっているか計り知れない。これからもゴルフへのあこがれを持ち続け、ゴルフを楽しみたいと思っている。

ぞうさんの贈り物

堀井隆川（山南町）

朝日新聞の社説にこんな記事が載っていた。童謡作家で八十八歳になられる、まど・みちおさんの話である。童謡「ぞうさん」の作詞家であるという。

ぞうさん　ぞうさん　おはなが　長いのね

そうよ　かあさんもながいのよ

作曲は、團伊玖磨さんだという、歌は知っていたが、作詩、作曲者についてはうっかり失念していたところである。それによると、筆者も「ぞうの子どもと母親の仲よしこよしの歌」と思っていた」といわれる。誰もがそのように受けとめていたのではないだろうか。ところがそれが見当違いだったのである。ご本人は、

「そうではないのです。ぞうの子が鼻が長いとけなされている歌なのです」

それでもぞうの子はしょげたりしない、むしろほめられたかのように、一番大好きなお母さんも長いと、いばって答える。

「それはぞうが、ぞうに生れたことは、すばらしいと思っ
ているからです」

ぞうに限らない。ウサギも、イワシも、すずめも、草も木も、地球に住む生き物たちすべてが自分であることを喜んで
いる。人間だってその中の一員である。これが、まどさんの
「ぞうさん」哲学なのだ。

アイデンティティとか「自分探し」といって自分の存在証
明に躍起になることもない「あるがままでいい」のだ、といっ
ているように思われる。

人間も他の生き物も、それぞれに違いがあるからこそ意味がある。違うものたちが、その違いを生かして助け合うことが最善の道。みんなが心ゆくまでに存在していい、共生の考え方だ。

まどさんは、相手の傷や痛みを自分で引き受けてしまう。そんな詩を読むと、何か途方もなく大切なことをなおざりにしたままでいることを気づかせてくれる。

まどさんは繰り返し蚊の詩を書く。刺しにくる蚊。思わずたたいてしまうのだが、まどさんは血を吸わなければ生きていけない蚊の身の上まで心を痛める。

きえいりそうに　よってくる

きんいろの　こえを

大げさに　たたいたあとになつて

ふと　おもうことだってある

むかしむかしの

りょうかんさんだったらばなあ……と

たたいてしまった自分に傷つき、蚊のことが気になるのだ。仏教のことは一口も語らないが、仏教の真理をそのまま表現して止まない詩人の心を改めて考えさせられる話である。

(真照寺住職)

わが師を語る

葛谷俊道先生

昭和十四年に柏原中学に赴任

〈経歴〉葛谷俊道先生は明治四十一年（一九〇八年）岐阜県羽島郡で出生、大正十一年四月に同県本巣中学校へ入学された。だが四年生に進級の同十四年四月に柏原中学校へ転入されている。それは旧上久下村上滝の説宗寺へ出家入寺されたからであった。「自分は中学生の頃は身体が弱く、いつも薬ビンを下げながら通学した」と授業中に述べられていたが、昭和二年三月には順調に同校を卒業された。東京高等師範学校への入学は翌年四月となっているが、その間に僧としての修行を済ませたのかも知れない。

編集部からのお願い

編集部では、郷土人物研究の一環として「わが師を語る」を連載することになりました。人物研究といえは「身を立て名を挙げ」て郷土の名を高めてくれた名士が対象となりますが、それらの傑出した人物を育て上げた教育者の存在も忘れることは出来ません。全国でも屈指の教育県であった兵庫県にあって、わが氷上郡も明治時代以来、優れた教育者を数多く輩出してきました。

柏高校歌制定で大活躍

昭和八年三月に同校を卒業され、長野県松本女子師範教諭、京都府立宮津中学校教諭を経て同十四年春に柏原中学校へ転勤となった。同校での勤務は学制改革で柏原高校となった後も続き、同三十九年春に兵庫県立川西高校の校長として栄転されるまでの二十五年間

そして、これは会員にとって書きやすい題材でもあります。小・中・高校いずれの先生でも結構です。広く親しまれた著名な方も良し、あるいは「かかる教師ありき」と伝えなければ会員のほとんどが知らない方もまた良し、ぜひ多くの会員が「わが師」の想い出を寄せられるよう期待しております。年齢が二回りも三回りも違う方々からの同一人物への想いでなどは素晴らしいではありませんか。だが寄稿された文が二、三年「待機」する場合もありますので、ご了承下さい。

（編集部）

に及び、「ボロさん」の愛称とともに卒業生で知らぬ者はない名物教師とされた。

なお昭和三十五年には教頭に任命された。それまでは教員組合の反対で正式に教頭の発令ができなかったと聞いているが、生徒指導の職務にある葛谷先生には担任学級がなく、職員室での配置からも実質的には教頭の役目を果



しておられるように思えた。柏中・柏高卒業生で五十代以上の会員には、お小言を頂戴した者も少なくないが、説得力があり、後に嫌みの残らないサッパリした叱り方であった。柏高校歌制定の際、有力な紹介者などいないまま著名な山田耕作的に飛び込んで作曲を依頼した活躍ぶりは今も語り継がれている。終戦直後の混乱期は過ぎ去っていたとはいえ、夜行列車での度々の上京は大変だったに違いない。

昭和四十四年春に校長を退職され、同五十四年秋には教育功労者として勲四等瑞宝賞を授与される。晩年には春日町の老人ホームで、絶えず訪れる教え子たちと旧交を暖めながら平成九年

黒い大きなカバンの

中身は？

細川 倫夫（山南町）

「ボロさん」の愛称で親しまれた葛谷先生追憶の小文を……と徳田編集委員から指名が舞い込んだ。文など滅多に書かないんだ、誰か他へ……と断ると「君はボロさんと同じ上久下村から同じ列車で柏高へ通っていた。しかもお寺さん同士で同業者だ。漢文の時間でも、一般の人々はこう読むが細川や我々はこう読む……と別格扱いだったじゃないか。まさに余人をもつて代え難し。なに？ 未だお参りもしていない？」

七月二十九日に八十九歳の長寿を全うして遷化された。今は後住の守る説宗寺に「前住妙心俊道磨和尚大禪師」として眠っておられる。心からご冥福をお祈りしたい。
《徳田八郎衛》

では罪滅ぼしに……と責め立てる。

たしかに私は旧上久下村下滝の禪寺の次男として育ってきたので、同村上滝の禪寺住職であった葛谷先生には何かにつけて可愛がって頂いた。教壇に立たれると独特のネバリがある大きな声の国語・漢文・書道の先生であり、また生徒指導の先生であったが、私にとっては「俊道和尚」の方が身近な想い出として残っている。私の拙ない文で葛谷先生の知られざる側面をお伝えできれば幸いである。

まず「和尚」としての思い出であるが、私の得度（仏門に入ること）の際にも丸刈り頭に剃刀を当てて下さったし、村内のお葬式や施餓鬼等の仏事では、横綱と序の口ほどの格の差があっ

たが法衣ころもを着た者同士となり、何かと教えて頂いた。高校時代にも何度が早退し、法衣に着替えてお葬式の場合と一緒にしている。冒頭に記した俊道和尚の「声」での読経・説教には迫力があり、聞き入る者に感銘を与え、弔われる者を安心して成仏させる声の持ち主であった。

次の想い出は、愛用の「大きな黒いカバン」である。とにかく大きく、しかも充分過ぎるほど膨らんだカバンで、一体何が入っているのかな？ と不思議に思ったことが再三あった。同じ下滝駅の利用者であり、そのカバンを持ち、プラットフォームで列車を待つて佇んでおられる姿が今でも眼に浮かんでくる。

どうしても書きたくなるのが「お酒好き」についてである。形容詞としては「人一倍の」がピッタリだと思う。酒量も相当のもので酔うほどに例の聲が一段と大きくなり、声質にもさらにネバリが加わって賑やかになってくる

が、決して酒席を乱されるようなことはなく、さすがに若い時から鍛えられている人であった……と、ここまでは良しとして、そのアトの自転車での帰路がいささか危なっかしい和尚さんであった。

荷台に縛り付けたハズの荷物をバラバラ落しながら寺に戻ったり、ある時はハンドルが言うことを聞いてくれなかったのか側溝にハマったり……とお酒好きな和尚は時折話題を提供されていたようだ。

ある日の授業風景

丸川健三郎（市島町）

葛谷先生の計報を洩れ承り驚いている。謹んで御冥福をお祈りしたい。

先生には柏原高校一年生のときに「漢文」を教わったが、実はお名前も

私の亡父（柏中23回卒）は、この秋に十七回忌を迎える。中学で三年後輩の俊道和尚（同26回卒）の極楽浄土入りは父より十五年後となるが、両和尚は久しぶりに再会し、俊道和尚が例の黒カバンの中に詰め込んで持参されたお酒を酌み交わし、賑やかに例の声で昔話をしていることだろう。そこは、周囲一面に蓮の花が咲いており、自転車なんか一台もない平和な世界だと聞いている。

合掌

あだ名も高校入学前から知っていた。兄からその名物先生のあだ名「ボロさん」の由来が「葛（くず）」にあると聞いたとき、高校生はなんてセンスがないのだらうと思ったが、やがて私も高校生になり、実物の葛谷先生にお目にかかることになった。

実をいうと、私はなかなか先生が好きにはなれなかった。もともと私は強そうな先生が苦手だったが、葛谷先生

もそのタイプで、あるいは度の強い眼鏡のせいかもしれないが、眼光が鋭すぎ、いつも睨み付けられているように感じていた。しかも、先生は不思議な方で、笑顔と睨み顔とが連続的に変化するというか、区別がつかないところがあるので、生徒としては油断がならなかった。一度だけ、先生に叱られたことがある。

ある日の授業のことだった。先生は授業中教壇から降りて、生徒の机の間を歩きながら講義をされることが多かったが、この日もそうだった。このやりかたは、先生と生徒との距離が近くなるという利点があるものの、先生の背中の位置に回る生徒を作ることにもなる。先生の目が届かない状態になれば、すぐさま悪さを始める生徒もいるのである。私の席はいちばん前の列の真ん中、つまり、特等席と言うべき位置だったが、左隣の生徒はともかく、右隣が良くなかった。授業中にささやきかけるとか、私の消しゴムを奪うとか、い

ろいろ悪さを仕掛けてくるのである。その時もそのようなことで私も必死に応戦し、身乗り出して悪者の二の腕をつかまえたのだが、まことに運が悪く、丁度、先生が教室の中ほどでくるとUターンをなさったところだった。「こら、マルカワなにをしとるか」

声の調子はともかく、お顔は笑顔だと見ていると、その笑顔のまま近寄って来られ、手に持ったチョークで私の坊主頭をこしこすられた。あはれ、私の頭はチョークの粉だらけになり、教室中の爆笑となってしまった。いま思い返してもまことに無念至極。よくあることだが、本当の悪者はすばしくて捕まることはないのである。

先生の授業はきびしかったが、説明はいつも明快で淀みがなかった。漢詩の朗詠を聞かせて下さったこともある。王維の有名な詩、「元二の安西に使いするを送る」であった。

渭城の朝雨輕塵をうるおす
客舍清々柳色新たななり

君に勧む更に尽くせ一杯の酒
西のかた陽関を出づれば故人無かん

少ししわがれ声ではあったが、朗々として良く通るお声が教室中に響き渡った。「出藍の誉れ」のあたりの授業も忘れられない。「青は藍より出て藍より青し」の講釈の後、目の前にいた私の顔を真正面からはたと睨みつけて、「どうだ分かったか。マルカワ」とおっしゃった。私は、また叱られそうな雰囲気を感じて身構えたが、よく見れば先生のお顔は本当の笑顔であった。先生はときどきこのように、意味もなく生徒の名前を話のつなぎに使われるのだが、効果があったようだ。

在学中は近付き難い感じの先生ではあったが、卒業後は漢文や漢詩に出会う度に先生を思い出している。思い出の中では、先生の笑顔は不思議に、熱意と慈愛に満ちた笑顔である。結局のところ、葛谷先生は良い先生であったに違いない。

柏原町長選挙で公開討論会

小田 晋 作（柏原町）

谷口務前町長の任期切れに伴う柏原町長選挙が七月二十六日に行われました。旅館「三友楼」を経営する前議会副議長の梅垣隆氏と、四十年間、同町役場に勤務した前収入役の堀幸一氏の、両新人の一騎打ちは、二七九〇票対二六四一票という僅差で梅垣氏に軍配が上がりました。

丹波新聞社ではこの選挙の公示（二十一日）に先立って七月初め、「二十一世紀の地方自治と柏原町」というテーマで、両氏に登場頂いて公開討論会を開きました。

町民の関心は非常に高く、会場の郡民会館には約四百人が集まりました。というのも、我が国の選挙制度では、立候補者の生の声を聴ける機会が少ないからです。

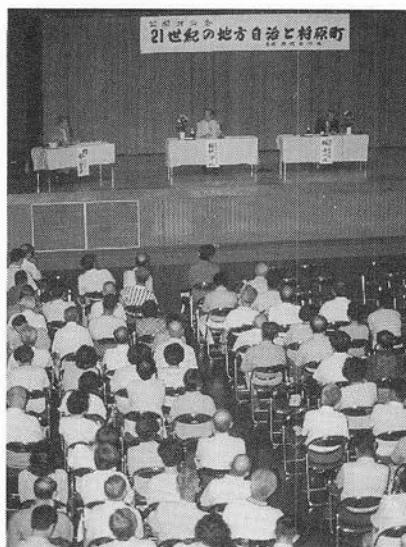
選挙法では、候補者は公示になってからでないと運動ができない。公示後も大勢の聴衆に政見を発表する場としては、以前にあった「立会演説会」の制度は廃止され、

「個人演説会」や「街頭演説会」しかない。市町村の選挙ではテレビの政見放送もない。

だから、候補者の人となりや考えを知ろうと思えば、個人演説会をのぞくぐらいしか方法はありませんが、個人演説会は事実上、後援会関係者による激励会のようになっていて、一般の有権者が会場に入るのは難しい雰囲気です。

選挙制度が「あれもいけない、これもまずい」と、ほとんど選挙運動に制約を加えてきた結果と思いますが、ともかく「制度の不備を補い、少しでも有権者に判断材料を提供する場を作ることができれば。そういう仕事も地域新聞社の役割の一つではなからうか」と思い立ったのが、公開討論会でした。

私が司会を務め、「地方分権という言葉をどう捉えているか」「現在の町財政をどのように認識しているか」といった基本的な問題から始まって、行財政改革や広域行政をどう進めるか、また日赤柏原病院の改築、ゴミ処理、介護保険、産業振興、空洞化する旧町内の活性化策など、具体的な問題についても両氏の意見を聞きました。司会役としては、両氏に対して「公示前なので、投票や支援の要請をする選挙法違反に問われる恐れがある。あくまで政策を話すように」と注意を払い、無論互いの



会場がぎっしり埋まった柏原町長選の公開討論会（氷上郡民会館）

話す時間なども含め、中立的な運営にも気を配らなければならず、問題が多岐に亘りすぎたきらいもあって、討論の深まりにはいま一步、もの足りない面があったかも知れません。

しかし、いくつかの問題では、両氏の考え方、重点の置き方の違いが浮き彫りになった点もありました。午後七時半から九時までの予定が九時半まで延びましたが、ほとんどの聴衆が席を立つともせず、野次一つ飛ばさずに耳を傾けてくれました。

こうして、同選挙に町民の関心を集めるのに一応成果をおさめたと言えると思いますが、その主因が何よりも、

両氏が積極的に参画し、フェアな態度で話して頂いたことであることは、言うまでもありません。

選挙制度も「規制緩和」のとき

国政選挙でも政党や候補予定者による公開討論を求める運動が全国的に起こりつつあり、やはり七月に行われた参議院議員選挙では、各地で催されたと聞きます。近年にない高い投票率を記録したのも、こうした運動と無関係ではなかったでしょう。

より多くの有権者に政治に目を向けさせるためには、政治自身をもっと魅力的になる必要があるのは勿論ですが、議員や首長の政策、政見を不断に有権者に知らせる努力が大切です。選挙制度自体も、投票時間や不在者投票に限らず、もっとオープンに「規制緩和」を図る時期に来ているのではないでしょうか。草の根選挙になればなるほど、一層そう言えると思います。

その意味では、柏原の討論会は先陣を切ったのでは。この動きが全国に広がることになれば、とひそかに願っている次第です。

（丹波新聞社社長主筆）

独鈷の滝

「丹波のむかしばなし」より

水上の香良という所に、こんなお話が伝わっています。今から千百年も昔のことです。今では、たくさんのお客さんで賑わう独鈷の滝の下は、そのころ大蛇がすんでいる恐ろしい池でした。あたりは、大きな木が茂り、昼でも薄暗くて、きみの悪い所でした。

村の人は、山仕事に行くのにも、滝のすぐ横を通らなければ、道はありませんでした。

「たろべえどん、香良というところは、こわいとこじやのう。いつ大蛇がおそってくるかもしれないで。山へ行くのもいやじゃわい。」

「ほんまに、わしらがすんどうる香良はこわいとこじや。こないだも上を見ると、ひとかかえもある大蛇がそれ、あの古い松の木にとぐろを巻いて、赤い舌をべろべろ出して、今にもおそってくるようじゃった。思い出しても、みぶるいがする。」「ああ、こわい、こわい。」

きのうは誰かがおそわれて、食べられたそうとか、

隣のじろべえさんが、おっかけられたそうとか、そんな恐ろしい話ばかり広がってきました。山仕事に行くのにも、村人は、

何人かでいっしょになって滝の横道を通って行くありさまでした。滝つぼも、大蛇が暴れるので、いつもにごっていました。

ある夜、弘法大師さまの夢枕に、住吉大明神があらわれ、「おまえの力で大蛇を退治して村人を救ってあげなさい。」とつけて、姿を消されました。このおつげを聞かれた弘法大師さまは、はるばる京都から、この丹波へやってこられました。住吉大明神が言われたとおり、それはそれは大きな蛇が池の中から頭を出して、大師さまをにらみつけています。

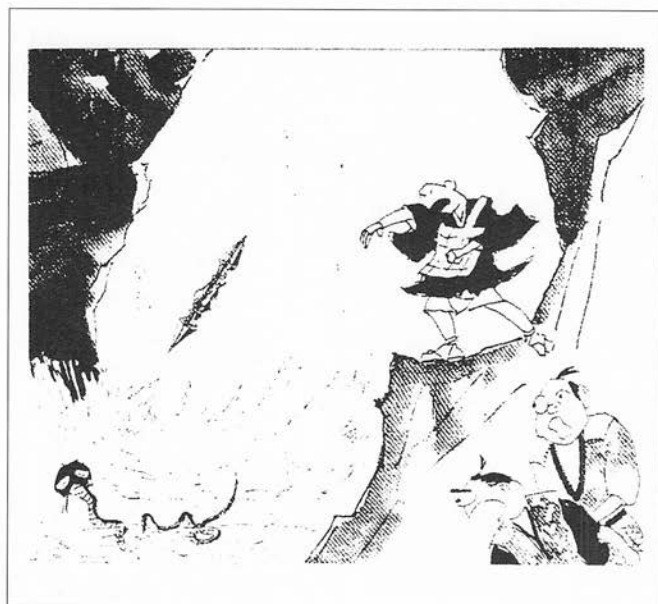
「おう、これは村の人も、さぞかし恐いことであらう。なんとか救ってあげなければ。」

そう思われた弘法大師さまは、滝つぼの前で一心に、お経をとなえはじめられました。

三日三晩、大師さまのお経の声が、村しもまで聞えたという事です。村の人も遠くからこのようすを見て、一緒にお祈りしました。

そして四日目の朝、持っておられた独鈷を滝つぼをめぐって、なげこまれました。

ふるさとの民話と伝説



すると、これはふしぎ……。今まで、恐ろしい姿をして舌を出していた大蛇は、みるみるうちに小さくなって、滝つぼの中へ、姿を消してしまいました。そして今のような、きれいなものとのかたまり

ほに返りました。

その後、弘法大師さまは、時の嵯峨天皇にお願いして、今の岩瀧寺というお寺を、建てられました。そしてお札に自分で石不動の像をきざんで、ほこらの中へおまつりされました。そして小さくなった、その大蛇の頭を、お寺の下に池を掘ってうめ、横に小さなおどうをたてて、丁ねいに、おまつりされたということです。今でも、このお社と蛇池は残っています。池の中へ、石をなげこむと、雨がふるといふ。言いつたえがあつて、村人に語りつがれているのです。

〈木呂子・転記〉

(注) 独鉋—銅・鉄で作る手に持つ両はしのとがった短棒、ぼんのうを打ちくたく意味あり。

この話は(財)丹波の森協会(柏原丹波の森公苑)発行の「丹波むかしばなし」から転記しました。

◎「丹波の森基金」へのご理解とご協力をお願い

丹波の森協会は丹波の自然と文化を維持発展させることに力をつくしております。郷里に來られたらぜひ私たちの森へ足をお運びください。

ふるさとの祭り

その3

谷川・常勝寺
「鬼こそ」

福知山線谷川駅の駅前集落は谷川だ
と思っていた。旧村名か大字（部落）
かは別として、石生も黒井も市島も竹
田も駅前の地名である。だが谷川出身
の友人の言では、この駅前は長野や
池谷であって篠山川を越えないと谷川
ではないそう。では駅名は谷川口に
すべきだったねと冷やかしたが、訪ね
てみると旧久下村の中心地、谷川まで
は駅から一キロはありそう。ここから
さらに二キロほど離れた南東の山々
が東山で、それから西側へ、谷川から
見て右手へ下がってくる稜線の中腹に
竹林山・常勝寺がある。

東山の麓につながる棚田の中央に集

落が見えてきた。それに入るには山田川という清流に架かる泉橋を渡らねばならない。その橋の手前に竹林山と記した大きな石碑が建ち、右上の山稜へ長い長い参道が続いている。この谷川たるや実に大きな大字で、この集落も谷川に属して第十区と呼ばれる。何と第十一区まであるそう。

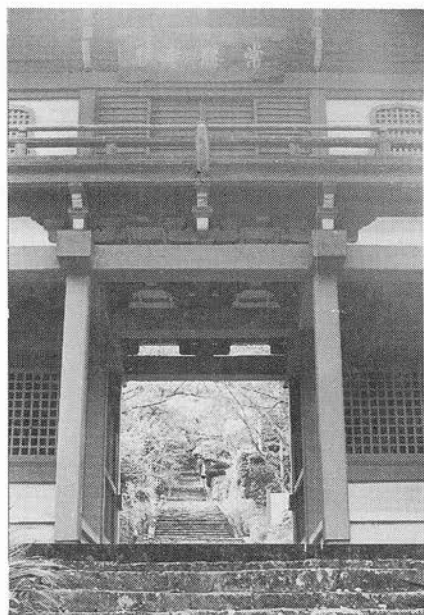
立派な仁王門をくぐり、一段上がるのに二歩歩む奥長の石段を三百六十五段登ると朱色の本堂がある。全長約三百メートルに及ぶ参道の右側には檀家の集会所や慈眼院および庫裏があり、左側は竹林山の名に恥じない立派な竹藪が続く。それも段々畑状で、かつて数多くの坊があったことが判る。下の方ではあじさい、中ほどから上には山百合が咲き誇り、沙羅の木や杉木立と併せて風格ある参道を形成している。

今は天台宗の寺院であるが、インドより渡来した法道仙人が開基した時期は孝徳天皇の大化年間（645）65

0）と伝えられる。何と唐で密教を学んだ最澄（伝教大師）が天台宗を開くよりも二百年近くも前のことだ。

こんな古いお寺が東京にあるだろうか。開基したのが仙人というのもううれしい。しかも御本尊の千手観音菩薩は仙人が持ってきたそう。永保年間（1081）1084）に天災を蒙って諸堂ごとく焼失し、その後、泉州の浄意上人が来山して再建したというが、その年月は不祥である。現存する観音菩薩像（銅像鍍金）は鎌倉時代初期の作と推定され、戦前は国宝だったが昭和二十五年に国指定重要文化財に変更された。

ところが、明智光秀が丹波へ侵攻する天正三年（1575）兵火にかかり、再び堂宇残らず焼失する。ここは玉巻城を睨んで布陣するのに緊要な高地だから、地元の久下一族も取らずまいと頑強な抵抗を試みたか、または高山寺、石龕寺と同様に山寨のような寺院をす



べて破壊する信長の方針で焼却されたのだろう。だが御本尊等は山麓の坂本の小字に安置し里人が代々護持したというから幸いにも何とか持ち出したのである。ようやく元禄十年（1697）良海法印によって再興され、幕末には慈眼院ほか四箇院が存在したが、今は慈眼院だけが残っている。

だからこの本堂も元禄時代の建物であるが、ここに立つと何やら奈良・平安時代の寺院、例えば浄瑠璃寺を連想

してしまう。それは左手に薬師如来（木像、もとは奥の院本尊で国指定重要文化財）を祭る薬師堂があり、右手に立派な阿弥陀池があるからだろう。池の側には不動明王、弁財天、三社権現宮の小さな社が祭られ、さらに境内の至る所に可愛い小さな石像が奉納されている。二体が対をなしており、右側の石像にだけ舟形の光背（こうはい）が付いている。

中世の念仏信仰の名残りかと思ったが、筆者の高校での級友で地元町議の大城戸美代子さんが思いがけない史実を伝えてくれた。婿殿の放蕩に悩む、ある女性に奉納したのを皮切りに同じスタイルの石像が続々納められ、境内に八十

八個所の霊場が誕生する。

昭和六十一年に九十五周年を記念して奉納者の名簿が作成されているから、この霊場完成は明治三十四年ということになる。第一号石像は参道左側の大師堂側にあり順次上へ連なっていくが、この大師堂も伝教大師ではなく弘法大師を祭っているそう。ちなみに大城戸さんのお祖母さんはこの地区の生まれである。

なお豊富な清水にも驚かされる。こは山の中腹というよりは稜線に近いのに、本堂の後ろから湧き出る清水は池をうるおし参道をサラサラと流れ下る。これなら明智勢が布陣したくなるはずだ。

この常勝寺をさらに有名なものにするのが本堂で節分の夜に行われてきた鬼追い行事「鬼こそ」である。今では建国記念日の午後に変更されたが、住職の般若若読経が終るとホラ貝や太鼓、鉦（かね）が鳴り響く中、灯明か



鬼追い行事「鬼こそ」

ら火を移された松明（たいまつ）を持つ赤鬼、矛を持つ青鬼、太刀の赤鬼、錫杖（シヤクジョウ）の青鬼という順番で四匹の鬼が仙人に先導され、本堂の回廊を独特のステップでゆつくり歩く。各々が病氣・水難・火災・風難を表わし、目玉が飛び出した異様な形相の面を被る。小柄な仙人役は小学生、鬼の四人は厄年の人が交代で務めるが、

鬼衣を着た身体をひもで縛りつけた鬼の装束も珍しい。

節分の豆まきで知られる追儺（ついな）、すなわち疫病や災厄を鬼のせいとして追い立て、五穀豊穡を祈る風習は全国に分布し、兵庫県下でも播州では多いのに丹波では常勝寺だけの行事である。六百年の伝統を持つというから民俗学的にも貴重な文化遺産だ。現



88個の石像の一つ

在着用の鬼面は最近彫られたものだが、保存されている古い面は室町時代の作と見られている。これも持ち出し成功のお陰である。

供えてある餅を矛と刀で三回突いて切る構えや、仏前でたいまつと矛を三回合せる「火合わせ」などの見せ場を演じながら回廊を一周すると先頭の赤鬼は松明を外へ放り投げ、見物客は争って手を伸ばす。燃えさしを箸の代りに養蚕作業に使うとよい繭ができることとされてきたが、養蚕もなくなった今は単なる厄払いだそうだ。

数々のメディアで報道され、カメラを持った三百名もの見物客が押し寄せる時代となったが、黙々と祖先の大いなる遺産を伝承してきた代々の地域の方々のご住職に改めて敬意を捧げたい。この松明さえも、塔頭（たつちゅう）の家筋だった足立家だけに作り方が伝えられてきたと聞く。（徳田八郎衛）

■会員が出版した本

自然に叶う生活が健康のもと

村上末吉著

『幸福の条件はまず健康です』

日本図書刊行会刊

健康は大切である。「命よりも大切だ」と言って笑わせていた人もいたが、不幸にして健康を損ね、命を失うとしたら、あながち逆説とばかりとは言えない。「死」が人生の究極の結果とするなら、「健康」はそれに至るプロセスであり、そのプロセスの幸福条件が「健康」であることは誰でも認めるところであろう。

さて、この自明の道理を表題に掲げて本が出版された。『幸福の条件はまず健康です』の著者は、関東水上郷友会の前会長・村上末吉さん。この人が自らの体験を通じて語る「健康談義」と思いきや、そこに少々工夫がこらされ、「中原謙一」なる

モデルから口述筆記したというスタイルをとる。健康談義が「手前みそ」にならぬよう客観化しようという工夫であるが、それが成功したかどうか。幼少の頃、虚弱体質で「七人兄弟の中で一番早死する」といわれながら、今八十歳まで生きてきたという健康への精進の道は、やはりご本人が語ってこそ説得力があるようにも思えるが……。

ともかく、健康への精進に並々ならぬ情熱を傾けた本であり、人生の

■郷里について書かれた本

郷里の「新」遺跡がわかる

森浩一企画 檀本誠一・瀬戸谷皓共著

『日本の古代遺跡 兵庫北部』

保育社刊

高速道路北近畿豊岡線の建設に伴って、春日町野村では数々の古代遺跡や戦国時代の野戦築城の跡が発見さ

大先輩が説く「健康法」には教えられるところが多い。本書の中で、著者は一貫して説く、「宇宙（自然）に叶った生活をすれば健康体になれる」と。そのために①規則正しい生活、②自然食を主体とした食事、③ストレスを溜めない心爽やかな生活をすべし、と説き、自然（神）はその恵みを与えるために「あなたをこの世に授けた」と健康でない人や不幸な人を勇気づけるメッセージを贈る。

〈池田〉

れた。水上・青垣町方面へ工事が伸展すれば、さらに新たな遺跡が見つかるだろう。大規模な土木工事は実に諸刃の剣で、自然破壊や遺跡破壊を伴う代りに工事がなければ恐らく知られないまま埋没し続けた遺跡を次々と発掘してくれる。

昭和五十年代の阪鶴高速道路工事によって春日町七日市遺跡の全貌も判明したが、道路は春日町と市島町

の丘陵部を通過したので、他には劇的な遺跡発見はなかったように思う。むしろ、その十年ほど前、日本列島改造論に丹波も沸いた頃、数々の遺跡が発見された。愚公ならぬブルドーザーが氷上郡内の山を動かし美田を埋めた波及効果である。もちろん破壊もあった。旧新井村と旧柏原町との境のシンボル、挙田古墳（通称、飯盛山）などは、そっくり消滅した。全てが土木仕事をきっかけとする発見ではなく、学術的な発掘調査による成果も少なくない。篠山川と佐治川の合流点に位置する丸山古墳群などはその一例である。だが高度な土木技術や透視技術が容易に低コストで利用できるようになった昭和四十九年だからこそ、あれほど徹底した発掘調査ができたといえるだろう。

まとめているから、それ以前に郷里を去った人々には是非読んで頂きたい郷土資料である。また多紀郡や但馬地方の遺跡とじっくり比較検討しているのも素晴らしい。兵庫県教委文化財課および豊岡郷土資料館に勤務する共著者がともに地理学、地形学に造詣が深いのも本書を興味あるものにしてている。氷上町石生の水分れ（みずわかれ）と記す小さなミスもあるが、「氷上盆地中央部は、集落遺跡の数は今のところ極めて少ないが、おそらく十分な分布調査が行なわれていないためであろう」という、後に野村遺跡発掘で見事に実証される優れた洞察を高く評価したい。

〈徳田〉

地元研究者が多面的に解説

丹波自然の会編『丹波の自然』

神戸新聞総合出版センター刊

「森の国」丹波は質の高い恵みをもたらし、深い伝統・文化を育んでいます。その丹波特有の地形・地質と、そこに生息する動植物を、地元研究者が解説。自然と触れ合うためのガイドとして、ハイキングコースなども紹介します……と表紙の帯に記されている。ハテナ、丹波のイメージは昔から山の国ではなかったか。森の国といえばフィンランドやドイツのシュワルツ・ワルト地方を連想してしまう。だが本書の刊行が平成七年一月、すなわち「丹波の森公苑」完成とはほぼ同じ時期であり、「丹波の森構想」実現への寄与も狙いとすることを知って愚問は解消した。

そうかといって本書は丹波の森公苑や丹波の森構想に便乗して泥縄で編集されたものではなく、半世紀の歴史を誇る丹波自然友の会が実施してきた自然観察、調査、採集、記録の集大成である。そして著名人を監修者に据えることなく、植物学専攻の大学教授や地元研究者の総勢二十

七名が平等な執筆者となっているのも好感が持てる。

もちろん二十七名の大所帯であるから文体や専門性（難解度）もマチマチであり、学術報告に近い文もあれば手引き・入門に徹する文もある。だが全般には門外漢に丹波の自然への関心を持たせようとするサービス精神に満ち溢れている。万葉集の引用、スッポン料理の効用、マツタケのおいしい食べ方に貴重な紙面が割かれることには異論もあろうが、本書を丹波自然友の会会員という身内ではなく広く一般読者に向けた教養書とするための努力の表われとして評価したい。

二十七名の執筆者が比較的高年齢かつ博識であるお陰で各分野ごとの歴史的エピソードが絶えず披露される。例えば氷上町成松の佐治川支流に生息するトゲウオは、当然ナリマツエかサジガワエという学術名を授かるべきだったのに、大正初期に柏

原中学校生徒に発見されて柏中教諭経由で報告されたため、カイバラエという学術名で登録されてしまった。おまけに東大総合資料館に残る模式標本は成松産ではなく京都産のものだ……山南町和田地区では大正初期に薬草としてのサフラン栽培が始まり、一時は全国生産量の八割以上を生産した。だが今や栽培農家は皆無である……だから本書は丹波自然研究史の一面も持っている。

だが残念ながら本書は丹波自然友の会の活動範疇外の事象や資料収集には消極的である。地球温暖化の今日、丹波での気温や積雪量の経年変化や酸性雨の影響などの報告は、ハイキングコースの紹介よりも必要ではなからうか。柏高生物班に劣らず活躍した気象班の丹波霧や風の調査も活かして頂きたかった。開発に伴う環境破壊は随所で嘆かれているが、星空の観察や生態系に影響を及ぼす光害の報告も欠如している。マツタ

ケ産額の変化にしても燃料革命が終りマツクイムシが跋扈した後の昭和六十年の記録を平成五年記録と比較するだけでなく、豊富だった昭和初期とも比較して欲しいし、竹田川と佐治川の汚濁指数も、二十五年も前の一九七二年の調査記録だけでなく最近のデータを一か所ずつでもよくから測定して添付されておれば、下水道完備前の貴重な記録となったに違いない。

とはいえ、これだけの多岐にわたる項目を分類し二十七名もの執筆者と調整するという執筆以上の難事業に当たられた永井莊一郎元柏原高校長以下の編集委員各位の労を多とするとともに、本書を我々への置き土産として昨秋逝かれた元丹波自然の会代表松山確郎先生のご冥福を祈る次第である。

〈徳田〉

柏高8回生還暦同窓会

足立 静雄（青垣町）

昨年十月に柏原高校八回生還暦同窓会が郷里の柏原高校で開かれました。



約百五十人が集まりましたが、年齢を重ねていても性格や顔立ちは約四十二年前とほとんど変わっていませんでした。柏高時代の私は極めて影が薄い存在でしたが、それにはそれなりの理由があります。

柏高一年の時、荻野先生に「日本で有名な哲学者である西田幾多郎の『善の研究』という本を読んでみなさい」と言われて読んでみましたが、全く何を書いてあるかわかりませんでした。しかし、これまでの見方とは別の見方がある、ということだけはわかりましたので、柏高時代は哲學書の「どりこ」になっていました。特にサルトル、カミュ、マルクス、キェルケゴールらに興味をもっていました。

このため、柏高の仲間はあまり興味がないうだったけれども、私は哲学を教えてくださいるところならどこでもよいと考え、某大学の哲学科に入ることになりました。私もそうであつたかもしれませんが、入学した仲間はそれぞれ

どうにも理解できないような人間ばかりでした。でも議論好きで、共産主義、実存主義、マルクス主義、社会主義などについて激しく、自由に議論する毎日でした。

そんなことばかりしていましたから、当時、日本は高度経済成長期で神武景気と言われるほど景気のよい時代でありましたが、私のような人間は一般企業は相手にしませんでしたので、新聞社という比較的自由な議論が許されるところに入って現在に至っています。

しかし、新聞社に入って三十数年になります。これまで何をしてきたのだろうかと思うとちょっと淋しい気持ちにもなります。現在、自動車メーカーや通産省、環境庁の記者クラブに行き、業界再編や省庁再編、地球温暖化問題などの取材をしています。日頃は誹謗中傷、ひがみ、嫉みが渦巻いています。しかし柏高の還暦記念同窓会は、そういうことを何もかも忘れることができます。本当に楽しい一日でした。

奥日光そして高野山 柏高9回生の集い

小林 和子

(旧姓足立、永上町)

郷里でも関東でも、ここ十数年欠かさず続けられてきた私たち「柏九会」の集いですが、昨年は卒業四十周年ということもあって特に燃え上がりしました。まず郷里では九月二十日に国領温泉へ百二十余名が集まり、われら関東組も含めて一部の参加者は泊まり込んで懇親を深めました。それに続いて関東でも十月四・五日に修学旅行で想い出の地、中禅寺湖へ出かけました。

郷里からも堀井校長以下三名が早朝の列車で出発し大阪や京都で仲間を集めながら駆けつけました。総勢二十五名が語り明かした翌朝は絶好の秋晴れで、それぞれに分れて戦場が原や男体山、東照宮に向いました(写真下)。

さて、還暦を迎えた今年も「大」柏



九会が郷里と関東の両方で秋に催されますが、それに先立つ七月二十五・二十六日、真言宗僧侶の堀井校長をガイドとして高野山研修バス旅行が郷里で企画され、京阪神組や関東組も併せて二十九名が参加しました(写真上)。

清々しい坊の朝、勤行ではわざわざ「柏九会物語者の霊」と唱えて頂いて先立つ同期生の霊を慰め、「ああ来てよかった」と一同感激。またバスの中では堀井さんならではの高野山紹介や仏教史解説があり、徳田さん提案の連歌(?)あり。行き先も道中も通



常の観光旅行とは一味違う意義ある柏九会でした。

ふるさとトピックス ― 丹波新聞 から

高齢化率一段とすすむ

青垣町で最高の26・4%

垣町で二六・四%、最低は柏原町の七・四%。

丹波地域十町の六十歳以上の高齢者の状況がまとまった。二月一日現在の六十歳以上が三五〇〇人、うち六十五歳以上が二七八七人、七十五歳以上一五一人。高齢化率の最高は青

丹波地域の総人口は二〇二六六人、世帯数は三五五三〇。前年同期に比べて総人口は六三六人増（〇・五%増）、世帯数は五九七世帯増（一・七%増）で、増加率が高い町は西紀町（対前年比一六八人増で三・九%増）。

老人人口は、六十五歳以上が

二七八七人、前年同期比七一〇人増（二・六%増）、七十五歳以上三六七人増（三・三%増、丹波地域の六十五歳以上の高齢化率は二三・二%で対前年比〇・五%上昇し、一段と高齢化が進行している。

丹波管内十町のうち、柏原町、丹南町を除く八町が二〇%超、うち青垣町、春日町、篠山町、

西紀町で二五%超（四人に一人が高齢者）となっている。

後期高齢化率（七十五歳以上）では青垣町、春日町、山南町、篠山町、西紀町の五町が一〇%超となっている。（平10・4・5付）

多紀郡婦人会考案の買い物袋に全国から引合い

ビニール袋や紙袋の無駄をなくす「マイバッグ運動」の一環として多紀郡連合婦人会が考案・販売したおしゃれな「買い物袋」が人気を呼び、遠く北海道の女性団体から千個以上の注文が入るなど、この二年間に九千個を超える売上げがあり、予想外の反響に同婦人会は「資源や環境問題を見直すきっかけになれば」と期待を寄せている。

この買い物袋は、メッシュ（編み目状）で、どの年代にも受け入れられるよう黒色にした。大きさは縦35cm、横45cm、底13cm、バッグに入れて持ち歩いたり、手に持ったり肩に掛けたりす

年度別推移
（過去5カ年各2月1日現在の高齢化率）

年	丹波	水上郡	多紀郡
平成 5 年	20.7%	20.4%	21.4%
平成 6 年	21.3%	20.9%	22.1%
平成 7 年	21.7%	21.4%	22.2%
平成 8 年	22.3%	22.1%	22.6%
平成 9 年	22.7%	22.6%	23.0%
平成10年	23.2%	23.1%	23.3%
対前年（増）	0.5%	0.5%	0.3%



ることできる。

県の婦人会などが展開している「環境にやさしい買い物運動」のシンボルマークをあしらってデザインにも工夫。地元の業者に製造を依頼した。種類は折り畳みのできるものと、そうでないものとの二種類、値段は八五〇円に抑えたが、当初はどの程度売れるか不安だったという。販売から二年たっても人気が衰えず「丈夫で、汚れても洗えばすぐに落ち、乾きも早い」と好評だ。

(平10・5・10付)

大型店開店で春日町の商店半数が売上げ、客数ともに減少

「コモレ丹波の森」「ゆめタウン氷上」と周辺に大型ショッピングセンターが相次ぎ開店して二年目を迎え、小売店がどのような影響を受けているかを探る実態調査を春日町商工会が行っていたが、このほどその結果がまとまった。

回答したのは春日町の小売業者一七〇人と消費者三八〇人。事業者への影響では、半数以上の店が売上げ、客数ともに減少している回答。大型店対策としては、サービスの向上を上げたのが五〇%を超え、低価格対策が次ぐが、商品や店舗改造など抜本的対策と答えた店は少なかった。

消費者調査では、前記二店と町内の大型店「アルティ」の利用度を探ったところ、アルティは毎日利用と週二、三回利用を合わせると五〇%と高い。逆に、コモレ、ゆめタウンは月に二、三回利用が約二五〜三〇%。年に数回

利用が四〇〜五〇%という結果になった。消費者の半数程は地元商店街の頑張りを期待している。

(平10・2・22付)

不況で大売出しも盛り上がりぬふるさと柏原夏まつり

この夏行われたふるさと柏原夏まつりや篠山町デカンショ祭りでも商店による福引き大売出しが、協賛する商店の減少と消費低迷で盛り上がりえず、関係者は「いつまでこの不景気が続くのか」と気を揉んでいる。

エアコンやデジタルカメラなど賞品にした柏原夏まつりの「福引大売出し」には、スーパードも含めた約一二〇店舗が協賛した。夏まつりに先がけ二日間、にわたって福引抽選会を行ったが、福引本数の三割強の減少に、柏原町商工会は「二割減ぐらいでとどまってくれ」と思っていたのに、予想外の結果」とがっかり。

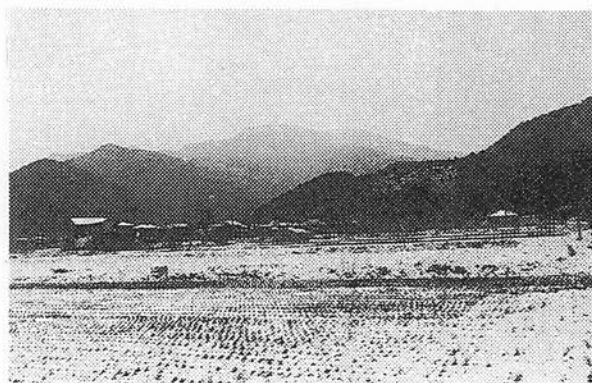
(平10・8・20付)

五台山・粟鹿山・竜ヶ岳など 「兵庫の五十山」に選ばれる

兵庫県山岳連盟は、このほど「ふるさと兵庫の五十山」を選定した。同連盟の創立五十周年記念事業として行ったもので、県民にふるさとの山と自然をアピールし、野外活動の振興をはかる一方、年内にガイドブックを刊行するほか、登山大会も計画。「自然活動や健康増進に役立てたい」としている。同山岳連盟では、一九九六年夏に選定委員会を発足させ、県下二一市、七〇町の行政当局にアンケート用紙によって回答を求め、各自治体の推薦を得た。推薦基準として①登山者、ハイカーに親しまれている山②登山の楽しさが味わえる山③頂上付近まで車道のある山は、他に登山道のあること④地域性も考慮し、県下全域百八十山の中から五十山に絞った。

丹波地区関係では、青垣・山東町の丹波の最高峰・粟鹿山（九六二m）、

加美・氷上町の竜ヶ岳（八一七m）、最近登山者が急増している氷上・市島町の五台山（六五五m）、春日・篠山、丹南町の三尾山（五八六m）、篠山・



阪神間の登山者に人気のある五台山
Ⅱ氷上町香良で

西紀の三嶽（七九三m）、山南・柏原町の石戸山（五四九m）、篠山町の弥十郎ヶ岳（七一五m）、丹南町の白髪岳（七二二m）の八山が入っている。五十山の中で最高峰は、氷ノ山（一五一〇m）で、最も低い山は加西市内の笠松山（二四二m）Ⅱ国の重要文化財「古法華寺石仏」があるⅡ、神戸の六甲山（九三一m）、日本三彦山の一つ夢前町の雪彦山（九一五m）、瀬戸内の眺めが美しい東播の高御位山（三〇四m）など有名な山が揃っている。

氷上郡内では、氷上町香良と市島町上鴨阪から登山できる五台山は、四季を通じて登山者が多く、阪神間の登山愛好者に人気のある山。氷上町北と前山自治振興会の登山交流会も行われている。コブシの花咲く三尾山も登山者が多い。最高峰栗が峰は、頂上にNTTやJR、建設省の通信基地がある。登山道は青垣町稲土と大碑からの二か所。

展覧会

●薫風会に久保良雄氏出品

久保さんは東京在住時は毎年グループ展をされていたが、新潟に転勤してからは初めての発表。出品作「日本海(冬―20号)」「写真」について「調子のいいとき速描きで、薄塗り、塗り直しということがほとんどありません。



今回の『日本海』は写生ではなく、心象、あるいは印象を描いたものです。海や空の様子は思い出しながら後から描いたものです。特に重油が流れ出したときの日本海というものが職務柄私も多少関わっただけに、意識下にあります」と話された。

それ故、前景の砂浜が中間色ながら美しいのに反して、海から空にかけての暗色(黒)は、北国の詩情だけではすまされない思いが、動的な力強さとなり、会場で群を抜くものとなった。(97年9月22日～28日、京橋・ギャラリークボタ)

●第11回青垣二〇〇一年日本画展

青垣が地方からの芸術文化の発信、振興の拠点となるようとの願いを込めての全国公募展。三五一点の応募から四八点の入選となった。大賞の山尾圭介氏の「自転車」(写真)は俯瞰した

角度とフォルム、人物の目から現代の不安感を感じる。



佳作の雲丹亀利彦氏の「午後の片隅」は「忘れかけていた何かが心の中をかすめ、日記のごとくその思いを心の中に刻みたく描いた」という。現実と自分の内部、その間をさまざま感じが出ている。塙峰夫氏の「風と人と街と」は朝の活気づいてゆく街を線の動きで。永井学氏の「黒潮の風―樹芽吹く―」は一見素直な写生画に見えるが、作者の人の、姿勢が絵の後ろにキチンとあっ

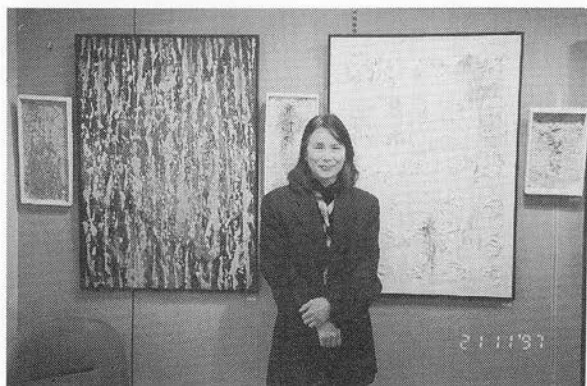
て地味だが好感をもった。全体に水準は上がっているように感じた。(97年12月1日〜6日、銀座、洋協アートホール)

●荻野美穂子展

市島町出身。「今回が抽象は初めてですが、今まで人物を描いていて、その形をくずせなかったので自分の思いが出しにくく、抽象の方が私の気持ちが表現しやすかった」

今までの作品は水彩画で具象ばかりと記憶しているが、作者(写真)の言葉の通り大きく変わる。

石膏で型どりをして、一度固まった石膏に更に水彩、アクリル等ボンドを混ぜ再度固めるといふ。透明なアクリル板に色をはさみこんで接着し、独特の効果を生んでいる。97年には抽象画で自由美術展に入選、そして今回もすべて抽象作品のみの発表。今までに具象にもよい作品があったので、それを



すべて捨て去るのは惜しい感じもしたが、今回の会場からは確かに自由なもののびとした表現と共に、作者の意気込みと活気が感じられた。
(97年11月17日〜21日、赤坂・ザ・スペースシュガー)

●篠原教室つづじ会・第13回 フランス刺繍作品展

篠原よね子さん主宰の作品展。木綿の糸での刺繍が特徴で、たとえ汚れても簡単に洗濯が出来るという。会場に入るとザックリとした厚み、ポリウムを感じる。

今回の篠原さんの作品で夕景二点が目立つ。「風景では特に夕景が大好き」なだけに、二点とも相当に形式化された作品だが、自然の実感を損なうことなく、実景から抽出した茜色、グレー、紫、黄緑、青などそれぞれ固有の色の美しさを生かしながら全体が調和している。二十年程前、初めて山水の刺繍展を京王デパートで開いたとき、大きな反響を呼んだという。数多い会員の作品は、卓上の花、日本画的な花鳥、版画的な風景など色の美しさと共に丁寧な仕事ぶりが目をひく。

他に棚やマガジンラック、小引出しなどに刺繍を組み込んだもの、ガラス

の飾り皿や銘々皿に刺繍が生かされた新製品もあり、バラエティに富んだ会場は盛会であった。(98年3月20～24日、銀座・かねまつホール)



●第45回陶彫展に可部美智子さん出品

陶彫展は可部さん所属の陶光会など九会派に所属する人達の研究グループ

展で約五〇名の会員で構成されている。彫刻には塑像、ブロンズ、木彫、石等があるが、何故陶彫なのかと尋ねると「彫刻にたずさわる者の陶へのあこがれ、火へのあこがれ」ということだった。可部さんは「俑」との出会いからそれがライフワークとなって、今回の「恵美須さま(可部さんの造語)」「大黒さま」「布袋」三点の出品。それぞれ大らかで丸くタップリとした作品。(98年6月15日～21日、銀座・アートホール)

●可部美智子陶展

「童心の世界を創ろうと二十数年……」の通り、子供の表情を生き生きとらえている。

写真の「けんかのあとは……」何となくまだ気まずい感じ。「読経修練」お寺の小僧さんの顔がユーモラスで面白い。陶板では「春風さん」少女の顔が春の空気に包まれる。「路地裏に遊

ぶ」子供の楽しい表情があどけない。「陽光」は子供を抱く母親の陶彫だが、母子の表情もさることながら、作品全体から受ける過不足のないバランスが、静かな動きと共に美しいフォルムを造っていた。(98年8月26～31日、小田急新宿店本館、工芸サロン)



〈以上、常岡幹彦・記〉

●常岡幹彦日本画個展

「あのまま日展の会員でいたら、この個展はなかった」と、日展の中枢にいる古老が感想を述べたそうだ。迷いつつも集団から飛び出し、「個」の確立を望んだ常岡氏にとって、この言葉はもっともうれしい賛辞だったにちがいない。

大小約二十点の作品には、スイスの大自然が活写され、薄明かりの会場に繰り上げられる「玄の世界」。そこには「玄」に向かい、真剣勝負をいどむ画家の、孤独な魂の叫びが込められている。

一週間の会期におよそ六百人の記帳者があったとか。「こちらからお礼状を発送する前に、大勢の方から『感動を伝えたい』というお手紙をいただき、恐縮しています」と常岡さん。さぞ、達成感に満たされていらっしやると思うが、ご挨拶状には「次回には勇気を画出して、もっともっと心底の吐露を画



面にのせられるよう務め」とあくまでも謙虚で、自虐的でさえある。

九月初めに、世界の「クロサワ」が逝去し、ある新聞の社説に「自分の作品に決して満足しないという監督の姿勢」について書かれていた。「百パーセント満足したら次の仕事ができない」

という。芸術家のこの宿命は、常岡幹彦画伯にも生涯ついてまわるのである。'98年7月14〜20日、日本橋三越本店美術部、特選画廊

〈上高子・記〉

●常岡文亀・幹彦「親子二代をつなぐ美の系譜」展

生誕百年を記念する常岡文亀・幹彦「親子二代をつなぐ美の系譜」展が左記の要領で開かれる。

○会 期 平成10年10月16日（金）

11月23日（月・祝）

○企画主催 氷上町立植野記念美術館

○開館時間 午前10時〜午後5時30分
（入場は午後4時30分迄）

月曜休館

○出品点数 文亀約三五点、幹彦約三

五点 計七〇点

同好者募集

●テニスの好きな方、
囲碁の好きな方へ

水上郡出身の人たちで年に何回か、一・二泊のテニスと碁の会をやっています。昼間はテニス、夜は囲碁のパターンでも楽しいですよ。

新会員の皆さまへ

巻末の郷友名簿に今年は約五百名の新会員が加まりました。近年郷里の高校を出て上京された若い郷友たちを一挙に収録しました。静岡以東、海外も関東水上郷友会のエリアです。記載もれの方がありませんでしたらぜひお知らせください。

したがって、今はいじめてこの『山ざる』誌をご覧になる方も多いいはずですよ。年に一度、この機関誌の発行と十一月の総会・懇親会とが関東水上郷友会恒

仲間が多い方がもっと楽しいのでは……と新たに仲間を募集しています。両方好きな方ももちろん、テニスだけ、囲碁だけの方も遠慮なくどうぞ。ご連絡、お問い合わせは谷口までお願いします。

川崎市麻生区多摩美 1-23-12
谷口捷 (TEL/FAX) 044-95210756

例の行事です。この『山ざる』誌は会が郷友の皆さまにもれなく贈呈するもので、会員の寄稿と有志のボランティアによってつくられます。

関東水上郷友会はずでに百年余の歴史をもち、多士彩々、老若男女が利害抜き垣根なしに交流する親睦のつどいです。

この会は年会費の二千元、『山ざる』誌の広告料、寄付金等で運営されていますが、必ずしも強制するものではありません。有志諸君のご協力を、ふるってお願いいたします。

■計報

平成九年九月一日より同十年八月三十一日まで事務局へ届いた計報です。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

植木	格殿	平成九年八月四日
片山	日幹殿	平成九年五月二十五日
下中	昭男殿	平成九年二月
正呂地	群治殿	平成九年七月四日
武田	辰雄殿	平成九年九月一六日
久安	敏夫殿	平成九年三月一日



猿

友

会

岸
本
昌
子

可
部
美
智
子

小
田
明
子

大
石
佐
代
子

井
田
悦
子

千
葉
淳
子

篠
原
よ
ね
子

笹
倉
郁
子

小
糸
イ
キ

喜
田
綾
子

渡
邊
貴
美
子

塩
見
み
つ
え

安
原
三
智
子

長
尾
貴
美
代



清水
行雄

建築材料販売工事
建設大臣許可第1834号

中央建材工業株式会社

取締役副社長 荻 野 武

(市島町出身)

本 社 名古屋市千種区高見 1-6-1
電話 052 (761) 6181 (代表)

144-005/東京支店 東京都大田区西蒲田 8丁目 9番10号
電話 03 (3730) 1281 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1-8-15
電話 06 (443) 6665

豊田営業所 愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3-4
電話 05613 (4) 3121

仙台出張所 仙台市青葉区高松 2-11-15
電話 022 (273) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7-12
電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5-1-25
電話 0252 (245) 1705

松本出張所 松本市野溝木工 1-6-58
電話 0263 (25) 0351

広島出張所 広島市西区中広町 1-4-16
電話 082 (291) 3780

請

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠

(氷上町黒田出身)

〒276-0034 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電 話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626



エクステリア専門商社

株式会社 エ プ コ ス

代表取締役 松 下 文 雄 (柏原町)

専務取締役 岡 吉 明 (柏原町)

専務取締役 広 瀬 寿 和 (山南町)

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折 3-7-5

TEL 048-466-1551 FAX 048-464-3471





調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山5-4-13
TEL・FAX 0297-72-0907

1924年創刊 週2回(日・木)発行
1ヵ月1,220円(郵送料200円)

全国各地、海外で活躍する丹波出身者の近況を
紹介する **丹波人NOW** が好評です。

99年秋完成予定の新社屋



丹波新聞社

〒669-3309 兵庫県氷上郡柏原町
Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956
E-mail tamba-ns@mxa.nkansai.ne.jp

代表取締役社長 小田 晋作



関東とふるさつをつなぐ「グローバル」な紙面

倉庫・運輸・化工の総合物流業
平成10年度事業として大阪支店を、春に開設しました。
丹波路への物流を目指して!!

三協運輸株式会社

取締役社長 岸 本 勲

(氷上町出身)

本 社 〒121-0064 東京都足立区保木間 1-1-3
TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631
大 阪 支 店 〒578-0911 大阪府東大阪市中新開 2-5-26-201
TEL 0729 (64) 6499 FAX 0729 (64) 6499
名古屋事業所 〒455-0021 愛知県名古屋市港区木場 1-4
TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (691) 8447
埼 玉 支 店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字坂田字畑谷 1500-1
TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381
倉 庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・九州

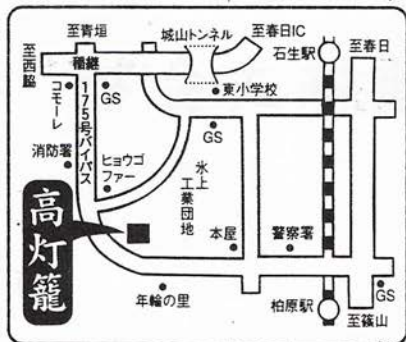
済
池田氏より
現金にて

日本の真ん中から出た
柏原天然温泉

たかとうろう
高灯籠

TEL **0795-73-1126**

669-3312 柏原町田路 不夜井



・舞鶴自動車道春日ICより城山トンネルを経て信号(縦線)左折、約1km

入浴料：大人550円

(中学生以上)

子供250円(小学生)

幼児100円

営業時間：朝9時～深夜3時

定休日：毎月第3木曜日

39



60代を共に歩む情報交流誌

隔月刊誌 [さすが&されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
／暮らしから世直しまで60代の知恵と体験で情報発信
します／年間購読料 3,500円(税・送料込み) 下記へ。

近刊■古稀記念に贈る▶**昭和4年生まれ**

■還暦記念に贈る▶**昭和14年生まれ**

上記2冊ともA5判 224頁／美装本・表紙布クロス・ケース入り／
定価 3,500円(送料・税込み)／直接下記へ・代金後払い

在庫■同時代シリーズ [昭和11年／昭和12年／昭和13年生まれ]／同上

既刊■記入式 [自分史年表] A5判 244頁／定価 1,500円(送料・税込み)

株式
会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区明石町 2-16-206
〒104-0044 ☎03(3248)6625
郵便振替 00130-5-144071

製造品目

船舶・艦艇・陸上用・自動制御盤
始動器・分電盤等

日本工業規格表示許可工場



桑畑電機株式会社

代表取締役社長 桑畑芳郎

(柏中48回卒)

〒551-0031

あこ 大阪市大正区泉尾2丁目22-3

TEL 06-552-0951 代表 FAX 06-552-0955

パソコン開発・データ入力・人材派遣

ケーエス電算システム株式会社

専務取締役 藤田徹

〒134-0083 東京都江戸川区中葛西5-41-8

金栄ビル2・3F

TEL 03-3675-4351

東京都ユニバーサルホッケー協会副会長
府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員
日産労働・エルタクラブ幹事
E M ネ ッ ト 埼 京 理 事

足立和巳

〒183-0051

東京都府中市栄町一―一五―二七
TEL・FAX ○四二―三六四―七二二七

足立かをる

13

足立勲平

〒251-0031

藤沢市鶴沼藤ヶ谷一―七―四
電話 ○四六六―二二―六四六一

ミワ電気工事株式会社

代表取締役

足立謙悟

〒235-0033

横浜磯子区杉田五―二二―一九
電話 ○四五―七七―二二六
FAX ○四五―七七―二二六

足立静雄

足立

株式会社
トレンタ

足立真一

〒211-0005

川崎市中原区新丸子町七〇―一
電話 ○四四―七二―六三七
自宅電話 ○四四―八五四―六三四〇

16

足立誠一

〒248-0031 鎌倉市鎌倉山四一八一二五
電話〇四六七―三一―三六〇〇

日本損害保険協会特級(二般)資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田光雄

〒285-0045 千葉県佐倉市白銀四一十四一五
電話〇四三一四八五一〇五〇三
FAX 〇四三一四八五一〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園

代表取締役 池畑豪士郎

177-0022
本社 東京都豊島区南池袋二一六―五
直販店 西武百貨店池袋本店B1
電話 〇三―三五九二―一五〇七六(直通)

生田清弘

東京都世田谷区成城一―七―七
電話 〇三一三四―一五一―八九三

井本義一

上田脩

〒112-0015 東京都文京区目白台二―九―一八一
四〇三



梶
原
清

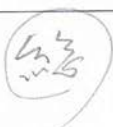
小
田
富
士
夫

24

大
野
善
三

自宅
〒 228
0821
相模原市相模台七一二五―八
電話 〇四二七―四六―八七九〇

20



久
保
春
雄

〒 300
0031
土浦市東崎町十三一二一六〇四
電話 〇二九八―二一二九七八



木
呂
子
恵
美
子

〒 204
0012
東京都清瀬市中清戸二一七五〇―八
電話 〇四二四―九一―三〇三三

株式会社 アイ・ケイ・アイ
代表取締役 岸 田 勇

〒 103
0013
東京都中央区日本橋人形町二一三四―一
SEED日本橋3F
電話 〇三―三二四九―五二六二

21

135

坂
上
勝
朗

栗
田
功

23

久
保
豊

株式会社
アン
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷三-六-1-3
電話 〇三-三四七八-七四二一代

22

〒161-0035 東京都新宿区中井二-十一-十八

佐
々
木
盛
雄

28 7/8/83

26

〒193-0816

東京都八王子市大楽寺町三八七-二〇
電話 〇四二六-二六-七〇八六

坂
本
重
雄

15

坂
上
豊

25

合唱指揮者

笙 倉 強

〒 352-0014
新座市栄四一五一二五
TEL・FAX 〇四八-四七七-五六四〇

勢 川 武 彦

〒 164-0003
東京都中野区東中野二一七一二〇
電話 〇三一三三六一八六七六

高 見 嘉 都 司

〒 173-0025
東京都板橋区能野町四〇番十一号
電話 〇三一三九五六一〇六〇〇

大菱印刷有限公司

田 中 寛

〒 110-0016
東京都台東区台東一二二七一五
大塚ビル
電話 〇三一三八三三一五九五

常 岡 幹 彦

鶴 田 宏

17

27

28

26

25

新田 浩迪

〒222-0002
横浜市港北区師岡町四一八
グリーンヒル大倉山C-106
電話 〇四五-五四一-三三二九

27/28

32

日本舞踊 端唄

根岸 西崎 妙祥

〒224-0027
横浜市都筑区大圃町五〇〇-一八
電話 〇四五-五九一-六六五五

17

田 英夫

〒100-0014
東京都千代田区永田町二-1-1
参議院議員会館229号室
電話 〇三-三五八一-三二二 内線 五三九

31

住職 堀井 隆川

青葉山 眞照寺
八王子 青葉靈苑
(都宮八王子霊園隣り
第二期募地分譲案内中)

〒193-0826
東京都八王子市元八王子町三-1-三三九七
電話 〇四二-六一六三一八四〇三

35

波多 洋三

〒112-0003
東京都文京区春日二-1-1七一二
電話 〇三-三八一-二八六〇

34

野村 豊

〒156-0055
東京都世田谷区船橋七-四-一二
電話 〇三-三四八二-九九三〇

28号 34

33

瑞豊産業株式会社

代表取締役
社長

水 船 隆 昌

〒102-0076

東京都千代田区五番町六
グレイス五番町ビル7F

電話 〇三―三三二二―一七三三

東京都行政書士會八王子支部 副支部長
小口・宮野合同事務所 所長

行政書士 宮 野 近

事務所

〒192-0063

八王子市元横山町二―一八―三宮野ビル
電話・FAX 〇四二六―二八―三三五三
八王子市打越町一―二―三
電話 〇四二六―三五―四三八五

自宅

〒192-0911

ウエディングドレス専門創作卸
株式会社 シヤルム商会

常務取締役
東京店店長

村 上 昇

東京店 〒164-0013

東京都中野区弥生三―五―三
電話 〇三―三三七四―〇二―五
京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 〇七五―二二二―〇二―五

本社 〒604-0885

村 上 久 夫

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東三―四―十二
電話 〇三―三三三二―一七―一三四

山 口 和 久

〒196-0031

東京都昭島市福島町二―一〇―二七
電話 〇四二―五四四―八八六一

PHP文化フォーラム 植生の宿

代 表 吉 住 自由造

〒216-0033

川崎市宮前区宮崎五―五―三五
電話 〇四四―八六六―三六二一

年会費納入にご協力を——会計係からお願い——
年会費二千円は本会の運営上重要な資金です。
ついつかりして未納の方も多数おられますので、
本誌が到着次第、添付の振込用紙によりお振込み
くださいますようお願い申し上げます。

渡 邊 隆 男

(2)

義 積 保

〒 277-0863
柏市豊四季七〇二一—
電話〇四七一—七四—〇三二五

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみと呼びおこします。そんな仲間のひろがり、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告二万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

集	編
記	後

★「ふるさとの祭り」を連載し始めたもののサッパリ寄稿が得られず四苦八苦。何たる愛郷心の欠如！ 後

発の「わが師を語る」は、遠く北の国からも玉稿が寄せられて一応は順調に発進しましたが、果たして将来は？ 先発の「祭」ともども活発な寄稿で守り立てて下さい。

(徳田)

★「笑う門には福来る」私の好きな諺である。あまり笑うと顔にしわがふえるよなどと我々の年齢になると気にする人もいるが、今医学的にも笑うことは実にいいことだそうです。夫婦二人だけの生活になるとあまり笑うこともないが、三歳の孫の話になるとつい笑ってしまう。でもこの孫もいつまでも笑いをくれるとは限らない。そうなれば自分たちで生活の中に冗談や遊び心を取り入れるセンスを養うことが大切だと思うこの頃である。

(片岡)

★本誌『山ざる』のめざしているものは

何でしょう。申込みもしないのにいつの頃からか『山ざる』が舞い込むようになった。ページを繰るとふるさとを彷彿とさせる懐かしい記事や写真がある。名簿を見ては旧交を温めたくなって仲間が増える。『山ざる』は氷上郡に縁のある人々が、近くなったとはいえやっぱり遠いふるさと丹波を居ながらにして味わえるさすがであれば願っています。より親しみあるものにするために皆様からの寄稿をお待ちします。『山ざる』からでなければ得られないものを感じとっていただけるように編集部員一同ボランティアで頑張っています。

(鶴田)

★出口の見えない長びく不況、これまで成長一途でただけに元気がなくなるのも無理からぬところですが、この経済社会、あらゆる商品が過剰に生産されて世界的にダブついてくればバランスを失って不況になるのは当たり前。物がなかった時代に比べれば、この社会はまだ余裕があるはずなのにアクセクする経済人間

の悲しいサガ、この不況を「普況」と受け止め、もう少し人間性のある社会に転換することを願うばかりです。

★編集委員の徳田八郎衛さんは、お口も達者だが、なかなかの書き手でもある。何より行動力もあって、写真と文の取材で丹波にも飛び、誌面の活性化には大いに役立っていただいた。彼の熱意と行動力に感謝する本号でした。

(池田)

山ざる 第29号

平成十年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
片岡クミ子 坂上勝朗 常岡幹彦
鶴田ゆき子 徳田八郎衛 本城英明
宮野 近 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長 渡邊 隆男

〒102 東京都千代田区神田小川町一ノ二
DMSビル内・関東水上郷友会・事務局

☎〇三(三三九三)二九六一

振替〇〇一〇一三〇一三三三三〇

製 作 株式会社二玄社
編集協力 株式会社ホンゴ出版

ダイレクト コミュニケーション 宣言

ダイレクト・マーケティングを「生活者に最も近いところで展開するプロモーション活動」として捉えるなら、そのベースにはコミュニケーションの発想がなくてはなりません。商品を売るだけではなく、生活者に心から満足していただくこと。一度限りのビジネスではなく、いつまでも末永くお付き合いいただける信頼を築くこと。DMSは、こうしたリレーションこそが最も重要という認識の上に立ち、『ダイレクト・コミュニケーション』を提唱しています。『ダイレクト・コミュニケーション』とは、マス・メディア、各種SPメディアでの情報発信により、ダイレクトにリスポンスがとれるソーウェイ型のコミュニケーション活動全般を指しています。多年にわたってデータベースに蓄積した情報と豊富なプロモーション・ノウハウをもとに、DMSは時代のニーズに即応したマーケティング戦略をご提案します。



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8
DMS第二ビル/ウエアハウス/朝霞業務センター ●お問い合わせ:営業本部 TEL 03-3293-2970

故宮博物院名蹟の完全複製

当社は台北の故宮博物院と合作、中国歴代の名筆名画四百余点を厳選、二十余年の歳月をかけ、先進技術の粋を駆使し、原蹟と寸分たがわぬ完全複製を完成、美術界の画期的大事業と世界の称賛を集めています。床の間に居間に、贈答に、悠久の芸術境をお楽しみください。詳細カタログ進呈。氷上郷友会々員には卸価格で提供。下記社長宛に一報下さい。

二玄社

社長 渡邊隆男

東京都千代田区神田
神保町2-2/〒101-8419

電話03-5210-4733

Fax. 03-5210-4723



P 32 王冕 南枝春早図 元時代

王冕（一三五九歿）は浙江の人。貧農に生まれたが苦学して博学な儒者となり、九里山中に隠遁し、竹を植え梅を育てながらもっぱら画で生計をたてた。この墨梅図は王冕晩年の傑作で、夥しい元時代梅花図の筆頭に位置する名品。老木の幹が屈曲して斜めに横たわり、枝がつつぎと天を突いて伸び、咲き誇る梅花と書が強い筆力と相まって画面いっぱいになり、生氣を放つ。俗に「昇り梅」には蓄財繁盛の縁起ありという。

絹本・水墨 桐箱入

画面寸法＝縦151×横52cm

軸装寸法＝縦200×横64cm

頒価＝69,000円(税別)